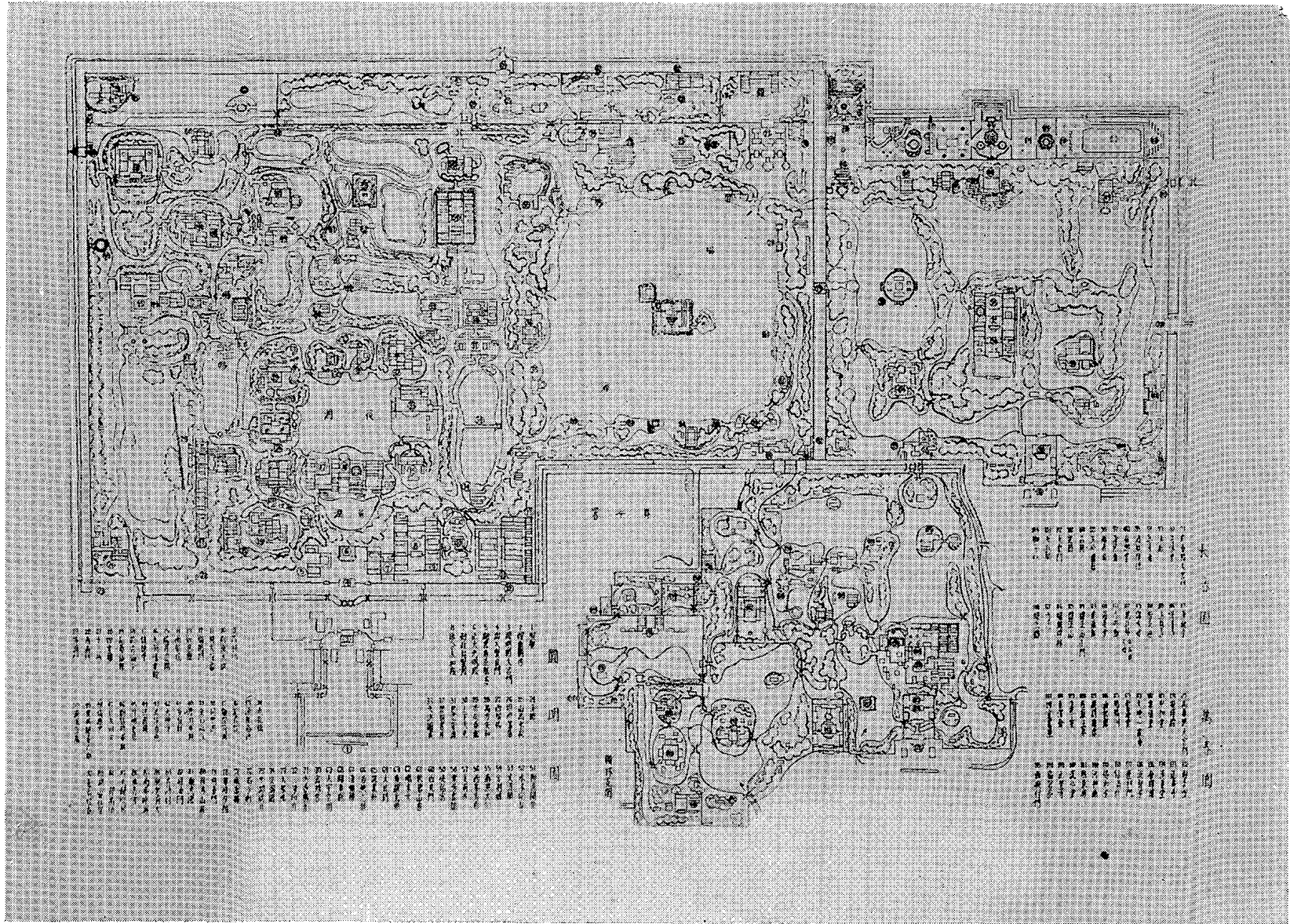


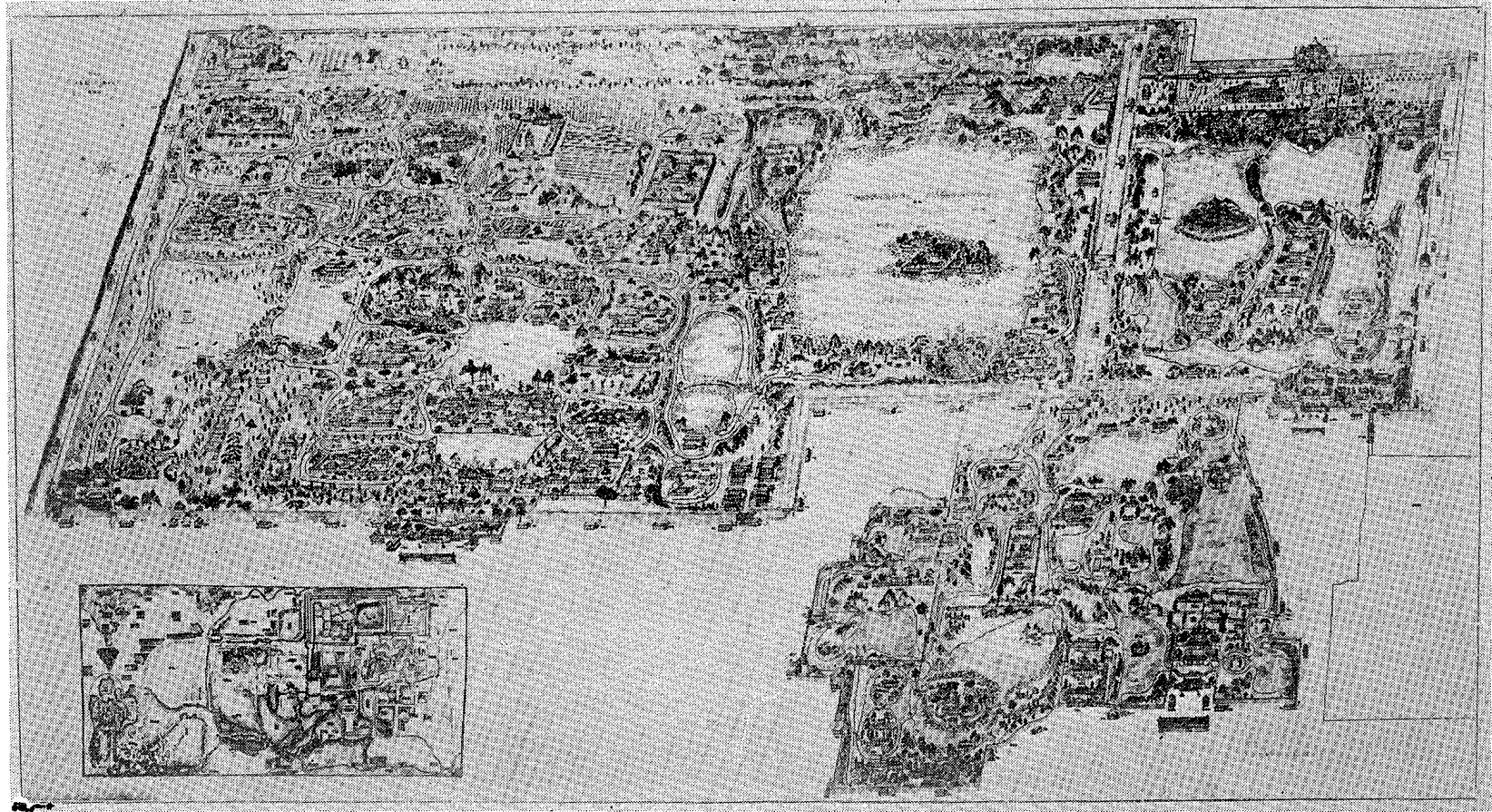
Title	圓明園の研究
Sub Title	Une etude sur le palais "Yuen-ming-yuen" (圓明園) de l'empereur K'ien-long (乾隆)
Author	後藤, 末雄(Goto, Sueo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1959
Jtitle	史学 Vol.32, No.3 (1959. 11) ,p.1a(245a)- 54(298)
JaLC DOI	
Abstract	<p>L'empereur K'ien-long n'admettait personne a entrer dans son magnifique palais Yuen-ming-yuen, sauf ses favorites. C'est pourquoi les documents historiques concernant ce palais manquent du cote chinois; on n'a comme documents que les deux prefaces mises en tete du recueil des poesies de cet empereur. On en trouve cependant de tres precieux chez les missionnaires jesuites francais qui travaillaient a la cour comme astronomes, horlogers, et artistes. Ils etaient appeles par le gout de l'empereur pour les choses europeennes, malgre l'interdiction de la foi chretienne dans le pays. Pour repondre a ce gout, la Compagnie de Jesus en France envoya aupres de l'empereur des missionnaires formes d'avance dans ce but. En fait, ce sont eux qui dresserent les cartes geographiques de tout l'empire chinois, presenterent des telescopos a l'empereur firent des experience de la machine pneumatique en sa presence et dresserent toutes sortes de tableaux. L'un d'eux fit installer des jets d'eau devant la premieres maisons europeennes construites dans le jardin du palais "Yuen-ming-yuen". Ces missionnaires francais racontaient a leurs superieurs ou a leurs amis tout ce qu'ils avaient fait et vu a Pekin. Leurs lettres out ete publiees dans le celebre recueil des "Lettres edifiantes et curieuses". L'empereur K'ien-long etait tres satisfait de ces missionnaires qui lui rendaient des services si remarquables, mais il ne revoqua jamais l'edit interdisant le christianisme. Helas ! en 1860, le palais "Yuen-ming-yuen" qu'on appelait le Versailles de l'Orient fut reduit en cendres, par l'armee anglofrancaise qui y avait mis le feu! Selon le prof. Goto, ce magnifique palais n'appartenait a la Chine, mais au monde entier. C'est donc un grand crime contre l'humanite que la destruction de ce palais chinois. On a par consequent le droit de blamer le vandalisme de cette armee. Mais a cette epoque, l'imperialisme etait un principe des grands Etats, et la conquete etait une gloire des rois. On aurait donc tort de blamer l'esprit de cette epoque au nom de la notre. Il faut noter que l'esprit humain n'etait pas encore arrive a la phase si pacifique et si intellectuelle d'aujourd'hui! D'ailleurs la guerre transforme les hommes en animaux ferores. Voyez les brutalites et les atrocites commises par les armees japonaises en Chine et dans d'autres pays du Sud Asiatique, il y a 20 ans. Le prof. Goto n'ose blamer l'armee anglo-francaise d'avoir brule le palais "Yuen-ming-yuen", il y a presque un. siecle. Il regrette vivement la perte de ce palais; c'est pourquoi il n'a essaye que de le reconstruire sur le papier, a l'aide de documents recueillis des deux cotes: chinois et francais.</p>
Notes	口絵:圓明園全圖, 海晏堂西面の噴水, 大水法正面
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19591100-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

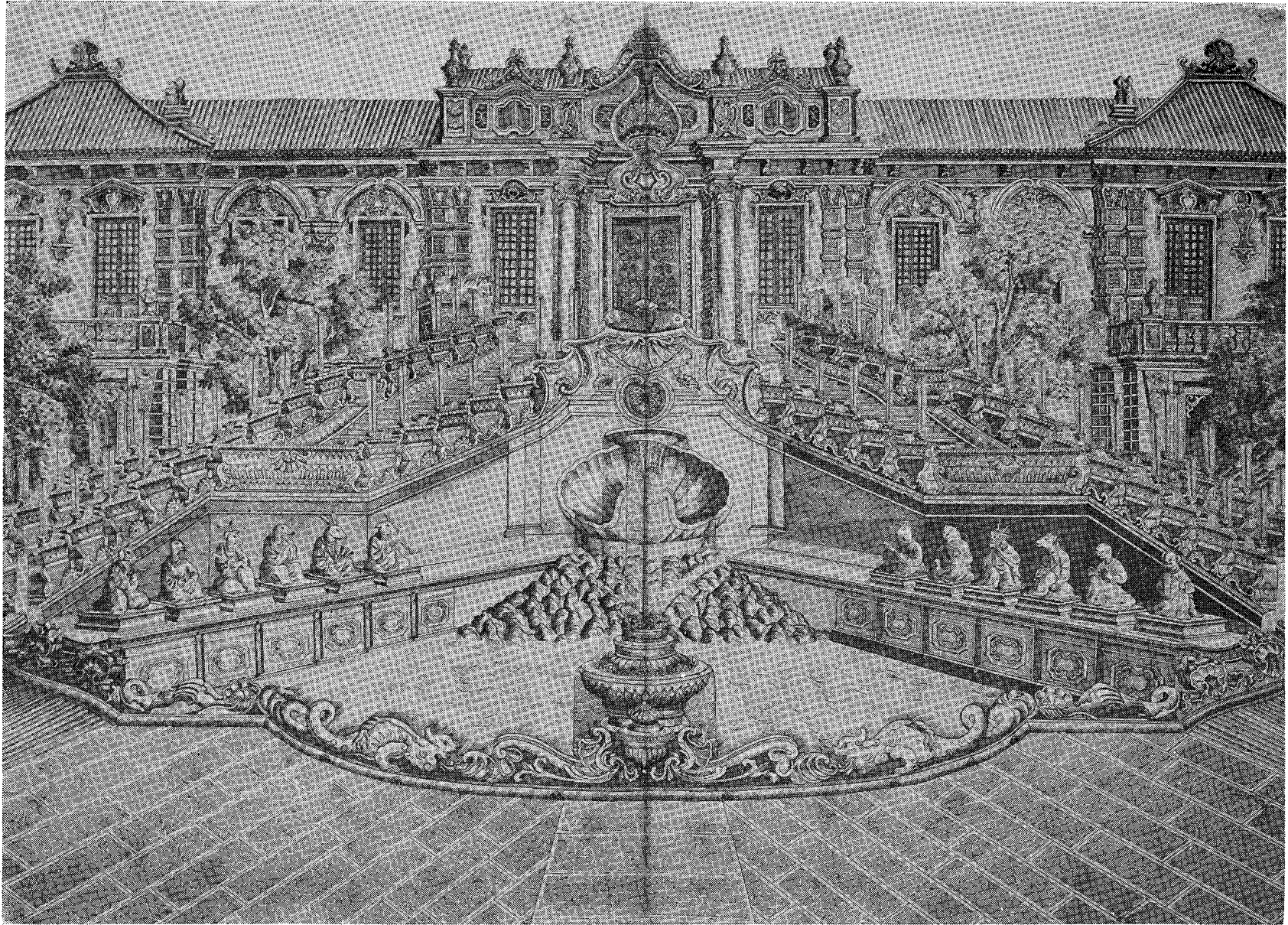
The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



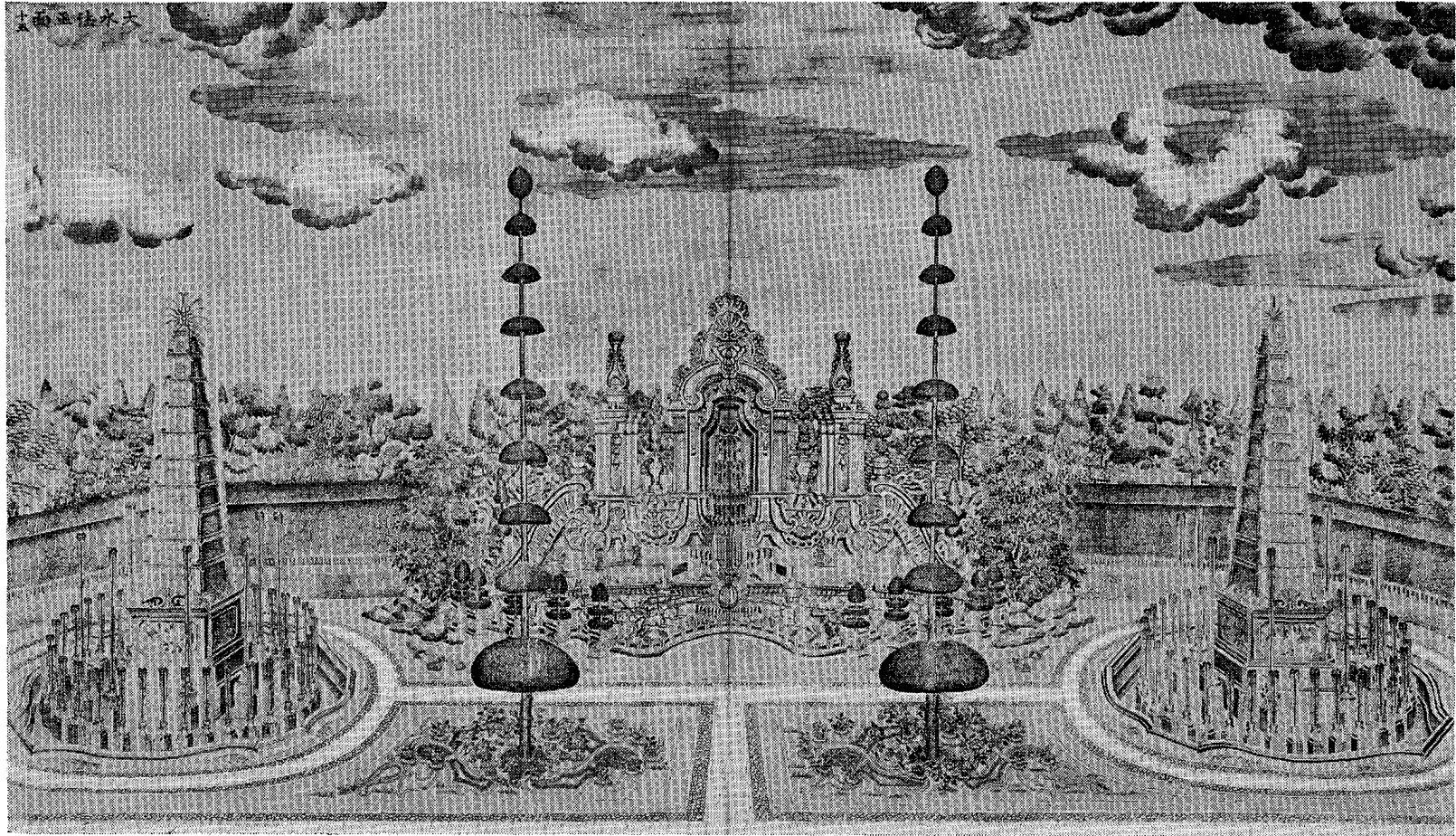
圓明園全圖 (モーリス・アダム「圓明園」より)



同上 モーリス・アダム「圓明園」より



海晏堂西面の噴水（モーリス・アダム(圓明園)より)



大水法正面（モーリス・アダム(圓明園)より）

圓明園の研究

後藤末雄

目次

- (I) 圓明園の名稱と増築工事の完成
- (II) 圓明園の風光と御製詩及び「四十景詩」
- (III) 圓明園に關するアッチレの記述
- (IV) 圓明園に西洋樓と噴水の築造
- (V) 圓明園の掠奪と燒毀
- (VI) 結語

(I) 圓明園の名稱

圓明園は北京の西直門外、皇城の西北にあたり、皇城から約二公里の地に位していた。雍正帝の「圓明園前記」に記載されている通り、康熙帝は此の地域に暢春園を構築し、陽春盛夏の候、屢々この新園に行幸された。そして帝の崩御されたのは、この暢春園に於いてであった。

康熙帝は生前、和碩雍親王（雍正帝）の爲に圓明園を新築し、園名をも賜つたのである。雍正帝の「前記」には左の一句がある。

「朕、扈蹕するを以つて、拜して一區を賜ふ。……園既に成る。慈恩を仰荷し、錫たまふに園額を以つてし、圓明と曰ふ」。なお圓明の語義に就いては「前記」に、

「嘉名の錫、圓明を以つてするが若ごときに至つては、意旨深遠にして、殊に未だ窺かんひ易からず。嘗こつて古籍の言かんがを稽へ、圓明の徳を體得するに、それ圓にして、神に入るは君子の時に中れるなり。明にして普く照らすは、達人の睿智なり。」とあるし、乾隆帝の「圓明園後記」には、

「宇物を周りて圓明なり。圓明の義、蓋し君子の時に中あたれるなり。皇祖、是名を以つて皇考に賜ふ。」とある。然らば「君子の時中」とは如何なる意味か。「時中」といふ言葉は「中庸」に出ている。

「仲尼曰。君子中庸。小人反中庸。君子之中庸也。君子而時中。小人之反中庸也。小人而無忌憚也。（仲尼曰く、君子は中庸す。小人は中庸に反す。君子の中庸や、君子にして時に中れるなり。小人の中庸に反するや。小人にして忌憚なきなり。）

朱熹は此の一句に次ぎの如き注釋を加えている。

「君子之所以爲中庸者。以其有君子之徳。而又能隨時以処中也（君子の中庸をなす所以のものは、その君子の徳ありて、而して又、よく時に隨つて中に処するを以つてなり。」

雍正帝が「嘗こつて古籍の言を稽へ……」と「前記」の中で言はれているが、この古籍とは「中庸」を指すに違いない。「時に中る」とは蓋し、君子の行動が常に中庸を得て、自然の理法に適合することを言うのである。故に雍正帝は「前記」の中で、「夫れ圓にして、神に入るは君子の時に中れるなり。明にして普く照らすは達人の睿智なり」と圓明の意味を解注されている。ついで乾隆帝は「宇物を周りて圓明なり」と言われ、君子の言動が悉く自然法則に適順して、

事の宜しきに隨うべきことを主張されている。

かくの如く圓明園といふ名稱には重大な道德的意義が含まれている。それにも拘らず、圓明園の結構と宏麗とを逸早くヨーロッパに紹介したフランス宣教師アッチレは、その書信（後章参照）の中で、圓明園を「名園中の名園」(Jardin des jardins) もしくは「天下第一の名園」(Jardin par excellence) と譯出しているが、残念ながら此の異教僧には、圓明の眞義が理解されていない。ペリオ教授は「通報」(T'oung-pao, 1921, p. 226) の中で、圓明園の圖と園とが同音なるが故に、アッチレ師は在支五年にも拘らず、圓と園との意味を混同したのだと非難しているが、この非難も当らない。ファヴィエ師は、その名著「北京」(Favier, Péking, 1897, 2 vol.) の中で、「慎重と明哲の庭園 (Jardin de la prudence et de la clarté) と譯して、園名を道德的に解釋している。またコンバは其の著「支那の宮殿」(Combaz, Les palais impériaux de la Chine) の中で、圓明園を Jardin de la clarté blonde と譯しているが、ペリオ博士は何かの誤植ではないかと言っている。そしてペリオ教授自身は Jardin de la clarté parfaite, 或は Jardin de la clarté ronde と遂語體に譯している。この方が稍と原意に近い。前述の通り、圓明の語義は極めて深遠であるから、これを字義通り、外國語に譯しても絶対に其の本義は表現されない。ましてやその由來を捉えて、其の道德的眞義を理解することが出来ない、その意義を譯出しようと試みても、その譯語は徒らに冗漫に陥って、また藝術感を表現することができない。なぜなら漢字は象形文字であり、常に藝術的印象を伴うからである。

要するにアッチレにしる、コンバにしる「御製圓明園詩」の卷頭に掲げられた雍正帝の「圓明園前記」及び乾隆帝の「後記」を一讀してゐない。西洋人のことで、何分、遠隔の地にあるし、訪書の便も缺けているし、殊に言語の相違から見ても、親しく原典を読むことは極めて困難だったであらう。現に世界第一の支那學者として自他共に許しているペ

リオ博士すら「予は此の詩集を所持すれども、目下、予の自由に任かせず」と斷わっている。その結果、雍正帝の「前記」と乾隆帝の「後記」との二序があることを知らずして、「乾隆帝の二序あり」と速断していることは、ペリオ教授の爲めに惜しまざるを得ない。

とにかく「前記」と「後記」とを併讀すれば、園名の由來をはじめ、諸般の事情が解るし、また圓明園の景觀を知ることが出来るから、左に兩記を轉載することにしよう。

世宗憲皇帝御製圓明園記

圓明園在暢春園之北。

圓明園は暢春園の北にあり。

朕藩邸所居

朕が藩邸にして居る所の

賜園也。在昔

賜園なり。在昔、

皇考聖祖仁帝聽政

皇考聖祖仁皇帝、聽政の

餘暇。遊憩於丹陵汙之

餘暇、丹陵汙の洿きに遊憩され。

洿。飲泉水而甘。爰就明

泉の水を飲めば甘しとして、爰すなはちに就ち

戚廢野。鄭縮其址。築暢

廢野き明戚し、その址を鄭縮して、

春園。熙春盛暑。時臨幸

暢春園を築けり。熙春盛暑、時に臨幸されき。

焉。朕以扈蹕。拜

朕、扈蹕するを以って拜して、

賜一區。林泉清淑。波淀

一區を賜ふ。林泉清淑、波淀

渟泓。因高就深。傍山依

渟泓、高きにより、深きに就き、山に傍そひ

水。相度地宜。構結亭榭。

水に依り、地宜、相度り、亭榭を構結し、

取天然之趣。省工役之煩。

天然の趣を取って工役の煩を省く。

檻花堤樹。不灌溉而

檻花堤樹、灌溉せずして、しかも

滋榮。巢鳥池魚。樂飛潛而自集。蓋以其地形爽塏。土壤豐嘉。百彙易以蕃昌。宅居於茲安吉也。

園既成。仰荷

慈恩。錫以園額。曰圓明。

朕嘗恭迓

變輿。欣承

色笈。慶天倫之樂。申愛

日之誠。花木林泉。咸增

榮寵。及朕繼承大統。夙

夜孜孜。齋居治事。雖炎

暑鬱蒸。不爲避暑迎涼之

計。時踰三載。僉謂大

禮告成。百務具舉。宜寧

神受福。少屏煩喧。而風

土清佳。惟園居爲勝。始

命所司。酌量修葺。亭臺

邸壑。悉仍舊觀。惟建設

軒墀。分列朝署。俾侍直

諸臣。有視事之所。構殿

於園之南鄉。以聽政。晨

滋榮す。巢鳥池魚、飛潛を樂んで

おのづから集る。蓋し其の地形の爽塏、

土壤の豐嘉なるを以って、百彙蕃昌し易く、

茲に宅居するは安吉なるを以ってなり。

園既に成る。慈恩を仰荷し

錫ふに園額を以ってし、圓明と曰ふ。

朕、嘗って恭しく變輿を迓へ、

欣んで色笈を承け、

天倫の樂しみを慶び、

愛日の誠を申さぬ。花木林泉、

咸、榮寵を増す。朕大統を繼承するに及び、

夙夜、孜孜、齋居して事を治む。

炎暑鬱蒸なりと雖、避暑迎涼

の計をなさず。時、三載を踰ゆ。僉謂ふ。

大禮成るを告げ、百務具さに舉がる。

宜しく神を寧んじ福を受け、少しく煩喧を屏くべし。

而して風土清佳だだ園居するを勝となすと。

始めて所司に命じて、修葺を酌量せしめ、

亭臺邸壑は悉く舊觀による。

ただ軒墀を建設し、朝署を分列し、

侍直の諸臣をして事を視るの所あらしむ。殿を

園の南郷に構へ、以って政を聽く。

曦初麗。夏暑方長。召對
咨詢。頻移書漏。與諸臣
相接見之時爲多。園之
中或闢田廬。或營蔬圃。
平原廡廡。嘉頻穰々。偶
一睡覽。則遐思區夏。普
祝有秋。至若憑欄觀稼。
臨陌占雲。望好雨之知
時。冀良苗之。應候則農
夫勸瘁。稽事艱難。其景
象又恍然在苑圍間也。
若乃林光晴霽。池影澄清。
淨練不波。遙峰入鏡。
朝暉夕月。映碧涵虛。道
妙自生。天懷頊朗。乘機
務之少暇。研經史以陶
情。拈韻揮毫。用資典學。
凡茲起居之有節。悉由
聖範之昭垂。隨地恪遵。
罔敢越軼。其采椽栝柱
素甍版扉。不斷不斫。不
施丹雘。則法

晨曦初めて麗しく、夏暑方きに長し。
召對咨詢、頻にして書漏を移し、諸臣と
相接見するの時、多きを爲す、園の中に
或に田廬を闢き、或は蔬圃を營む。
平原廡廡、嘉頻穰穰、偶
一たび睡覽すれば遐かに區夏を思ひ、
普く秋を有るを祝す。欄に憑って稼を觀、
陌に臨んで雲を占するが若きに至っては好雨の時を知るを望み、
良苗の候に應ずることを冀ふ。
則ち農天の勸瘁、稽事の艱難、
その景象恍然として苑圍の間にあるなり。
もし乃ち林光晴霽、池影澄清、
淨波動かず、遙峰、鏡に入り、
朝暉夕月、映碧、虚を涵し
道妙自から生じ、天懷頊朗ならば
機務の少暇に乘じ、經史を研め、
以って情を陶し、韻を拈り、豪を揮ひ、もって典學に資す。
凡そ茲に起居の節あるは、悉く
聖範の昭垂によるなり。地に隨つて
恪遵し、敢へて軼を越ゆることなし。
その采椽栝柱、素甍版扉、斷たず、斫らず
丹雘を施さざるは則ち皇考

皇考之節儉也。晝接臣

僚。宵坡章奏。校文於墀。

觀射於圃。燕間齋肅。動

作有恒。則法

皇考之勤勞也。春秋佳

日。景物芳鮮。禽奏和聲。

花凝湛露。偶召諸王大

臣。從容遊賞。濟以舟楫。

餉以果蔬。一體宣情。抒

寫暢洽。仰觀俯察。遊泳

適宜。萬象畢呈。心神怡

曠。此則法

皇考之親賢禮下。對時

育物也。至若嘉名之

錫。以圓明意旨深遠。殊

未易窺。嘗稽古籍之言。

體認圓明之德。夫圓而

入神君子之時中也。明

而普照達人之叡知也。

若舉斯義以銘戶牖。以

勗身心。虔體

天意。永懷

の節儉に法るなり。晝は臣僚に接し、

宵に章奏を坡き、文を墀に校し、

射を圃に觀、燕間齋肅にして、

動作恒あるは則ち皇考の

勤勞に法るなり。春秋佳日

景物芳鮮、禽は和聲を奏し、

花は湛露を凝らす。偶、諸王大臣を

召し、從容として遊賞す。濟すに舟楫を以ってし、

餉ふに果蔬を以ってす。一體情を宣へ

抒寫暢合す。仰觀俯察して、遊泳

宜しきに適ふ。萬象畢く呈し、心神

怡曠するは、これ則ち

皇考の賢に親しみ、下を禮し、時に對して、

物を育るに法るなり。嘉名の錫、

圓明を以ってするが若きに至っては、意旨深遠にして、

殊に未だ窺ひ易からず。嘗って古籍の言を稽へ、

圓明の徳を體得するに、夫れ圓にして、

神に入るは君子の時中なり。

明にして普く照らすは達人の叡知なり。

若し斯の義を擧げて、以って戶牖に銘し、

以って身心の

天意を虔體し、

聖誨。合照品彙。長養元和。不求自安。而期萬方之寧謐。不圖自逸。而冀百族之恬熙。庶幾世躋春臺人。遊樂園廓鴻基。以上答

皇考垂祐之深恩。而朕之心。至是或可以少慰也。夫爰宣示予懷。而爲之記。

仰惟

皇考爲是記述

皇祖名園本義以自傲。

而貽訓後人之意。

尤深切著明。予小

子紹衣

德言。夙夜罔斁。今刻園

中諸什。敬錄

斯文。辨之首簡、庶一開

卷。如親

提誨。用志堂構之思云。

永く聖誨を懷ふに勗めなば

品彙を合照して長く元和を養はん。

自から安ずるを求めずして、萬方の寧謐を期し。

自ら逸しむを圖らずして、百族の恬熙を冀ふ。

世に春臺に躋る人、園廓の鴻基に遊樂せんことを庶幾ふ。

以って上

皇考垂祐の深恩に答へん。

而して朕の心ここに至って少しく慰むべきなり。

それ爰に予が懷を宣示して、

これが記をつくる。

仰ぎ惟るに

皇考これがために

皇祖名園の本義を記述し以って自から傲め、

而して後人に貽訓するの意、

尤も深切著明なり。予、小子

德言を紹衣し、夙夜罔斁るなし。

園中の諸什に刻して、

斯の文を敬録し、

これが首簡に辨ず。

一たび卷を開けは提誨に親しむが如きを庶ひ、

もつて堂構の思ひをしるすといふ。

圓明園後記

昔我

皇考。因

皇祖之賜園終而茸之。略

具朝署之規。以乘時

行令布政親賢。而軒

墀亭榭。凸山凹池之

紛列於後者。不尙其

華。尙其朴。不稱其富。

稱其幽。樂蕃植則有

灌木叢花。怒生笑迎

也。驗農桑則有田廬

蔬園。量雨較晴也。松

風水月入襟懷。而妙

道自生也。細旃廣夏。

時接儒臣研經史以

淑情也。或怡悅干斯。

或歌詠干斯。或惕息

干斯。我

皇考之先憂後樂。一

皇祖之先憂後樂。周宇物

而

昔、我が

皇考、

皇祖の賜園により、修めて之れを茸き、

ほぼ朝署の規を具ふ。以て時に乘じて、

令を行ひ、政を布き、賢に親しめり。

而して軒墀亭榭、凸山凹池の

後ろに紛列するは、その華を尙ばずして、

その朴を尙び、その富を稱せずして、

その幽を稱す。蕃植を樂めば則ち

灌木叢花の怒生して笑迎するあり。

農桑を驗ずれば田廬

蔬園の雨を量り、晴を較するあり。

松風清月襟懷に入りて、

妙道自から生ず。細旃廣夏

時に儒臣に接して經史を研め、

以て情を淑ぐ。或は斯に怡悅し、

或は斯に歌詠し、或は

斯に惕息す。我が

皇考の先憂後樂は

皇祖の先憂後樂と一つなり、

宇物を周りて圓明なり、

圓明也。圓明之義。蓋君

子之時中也。

皇祖以是名賜

皇考。

圓明の義、蓋し

君子の時にまは中れるなり。

皇祖、是名を以って

皇考に賜ふ。

皇考敬受之。而身心以勗。

戶牖以銘也。不求自

安。而期萬方之寧謐。

不圖自逸。而冀百族

之恬熙。則又我

皇考綏履垂裕於無窮也。

予小子敬奉

先帝宮室花園。常恐貽羞。

敢有所增益。是以踐

祚後、所司以建園請

卻之。既釋服、爰仍

皇考之舊園。而居焉。夫帝

王臨朝。親政之暇。必

有遊觀曠覽之地。然

得其宜。適以養性。而

陶情。失其宜。適以玩

物而喪志。宮室殿御

奇技玩好之念切。則

皇考これを敬愛し、身心以って勗め、

戶牖以って銘す。自から安するを求めずして、

萬方の寧謐たらんことを期し、

自から逸しむを圖らずして百族の恬熙を冀へば、

則ち我が

皇考の無窮に履を綏じ、裕を垂るるなり。

予小子

先帝の宮室花園を敬奉して、常に羞を貽すを恐る。

敢へて增益する所あらんや。是を以って踐祚の後、

所司、園を建てるを以って請へども、

之れを卻く。既に服を釋つ。爰に

皇考の舊園によつて居る。

それ帝王、朝に臨み、政を視るの暇には

遊觀曠覽の地あり。

然して其の宜しきを得れば、たまく以って性を養ひ、

情を陶す。その宜しきを失へば

たまく以って物を遊び、志を喪ふ。宮室殿御、

奇技玩好の念、切なれば則ち、

親賢納諫。勤政愛民
之念疎矣。其害可勝
言哉。我

皇考未就

暢春園而居者。以有此
圓明園也。而不斷不雕

一

皇祖淳樸之心。然規模之

宏敞。邱壑之幽深。風

土草木之清佳。高樓

遽室之具備。亦可稱

觀止。實天保地靈之

區。帝王豫遊之地。無

以踰此。後世子孫。必

不舍此。而重費民財

以創建苑囿。斯則深

契朕法

皇考勤儉之心。以爲心矣

籍口

祖考所居。不忍居也。則

宮禁又當何如。晉張老

之善頌。甚可味也。若

賢に親しみ、諫を納れ、政に勤め、民を愛するの念。
疎なり。其の害、言ふに勝ふべけんや。

我が

皇考、未だ

暢春園に就きて居らざるは

此の圓明園あるを以ってなり。而して斷らず。

雕らざるは皇祖淳樸の心を一にするなり。

然れども規模の宏敞

邱壑の幽深、

風土草木の清佳、高樓

遽室の具備もまた觀止と稱すべし。

實に天保地靈の區

帝王豫遊の地

これに踰ゆるなし。後世の子孫、必ず

これを捨て、重ねて民財を費やし

以ってここに苑囿を創建せずんば斯れ則ち朕が

皇考の勤儉の心に法りて、以って心とすることに

深契せん。

祖考の居る所、

居るに忍びざるに籍口すれば則ち

宮禁又まさにいかんすべき。

晋の張老の善頌、甚だ味ふべきなり。

夫建園始末。

若しそれ建園の始末、

聖人對時育物修文崇武

聖人、時に對して物を育て、文を修め、武を崇め、

煦萬彙保大和。期躋

萬彙を煦らし、太和を保つ。

斯世於春臺。遊斯人

この世を春臺に躋らしめ、この人を

於樂國之意。則已具

樂國に遊ばしむるを期するの意は

皇考之前記。予小子何能

已に皇考の前記に具はれり。

贅一辭焉。

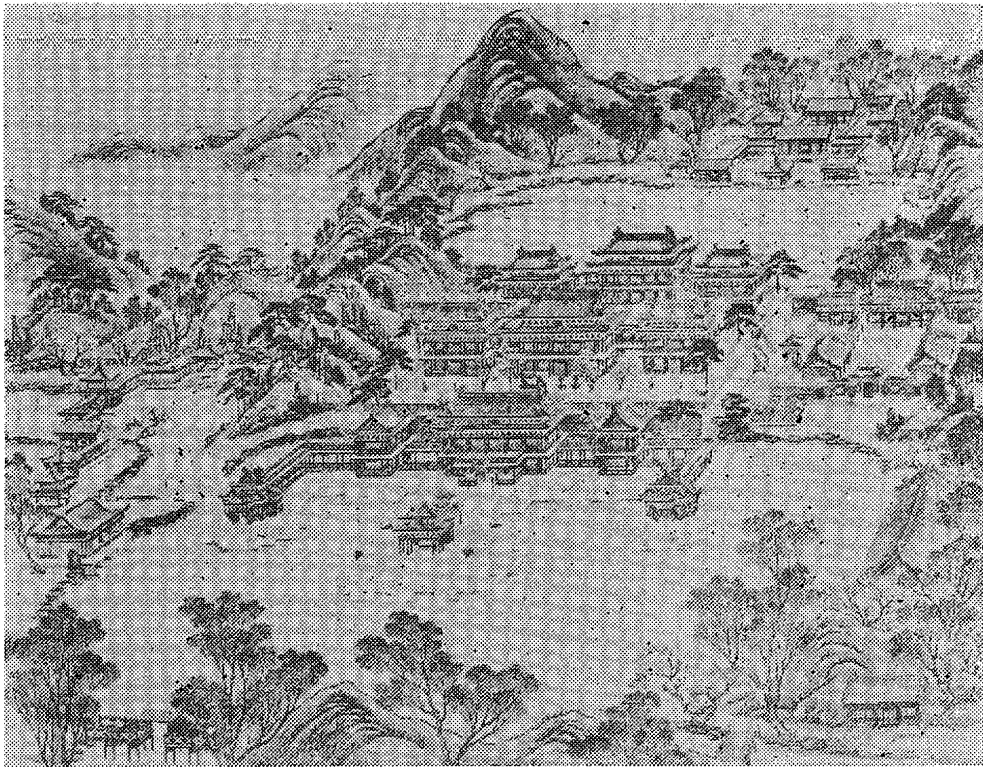
予小子、何んぞ能く一辭を贅せん。

乾隆帝は「後記」の中で「先考、雍正帝の勤儉の意に法る心」だの、「奇技玩好の念が盛んになれば、愛民政治の念に故障を来たして、その害、言うに堪えず」だのと神妙なことを述べ立てて居られるが實際には圓明園を大増築して、阿房宮以上の豪華殿を地上に実現せしめたのである。換言すれば此の豪華ぶりは「圓明」という語義を裏切るものと言わなければならぬ。なぜなら前述の通り、圓明とは君子の時に中ることであり、中庸の徳を意味し、すべて過激の欲念を慎しむことだからである。

ヴェルサイユ離宮を構築したルイ十四世は、臨終の際、皇太子を枕頭に呼んで、「巨大な土木工事を起したことは、朕が失政の一つであった」と言つて、君王の豪華を誡めたと近代史は傳えている。ルイ十四世の歿後、また乾隆帝の崩御を機として、フランスも中國も、國勢の振わなくなった原因の一つは、專制君主の大離宮建設によって、民財を枯渇せしめたことにあると確信せざるを得ない。

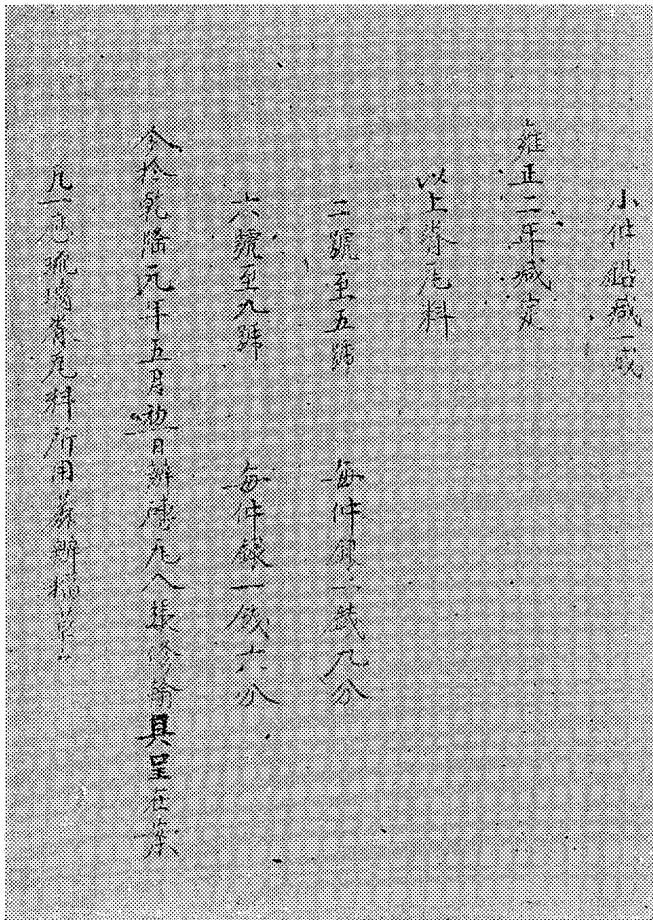
なお圓明園の増益工事は乾隆何年に始まり、同何年に落成したかに就いては、少くとも私の参照した漢籍文献には、此の問題が記載されていない。しかしペリオ博士は「御製圓明園詩」が一七五〇年（乾隆十年）前に編纂の完了したこ

と主張してゐるが、(Conquêtes de l'empereur de la Chine, pp. 229~230)、実際「圓明園四十景詩」は乾隆帝の

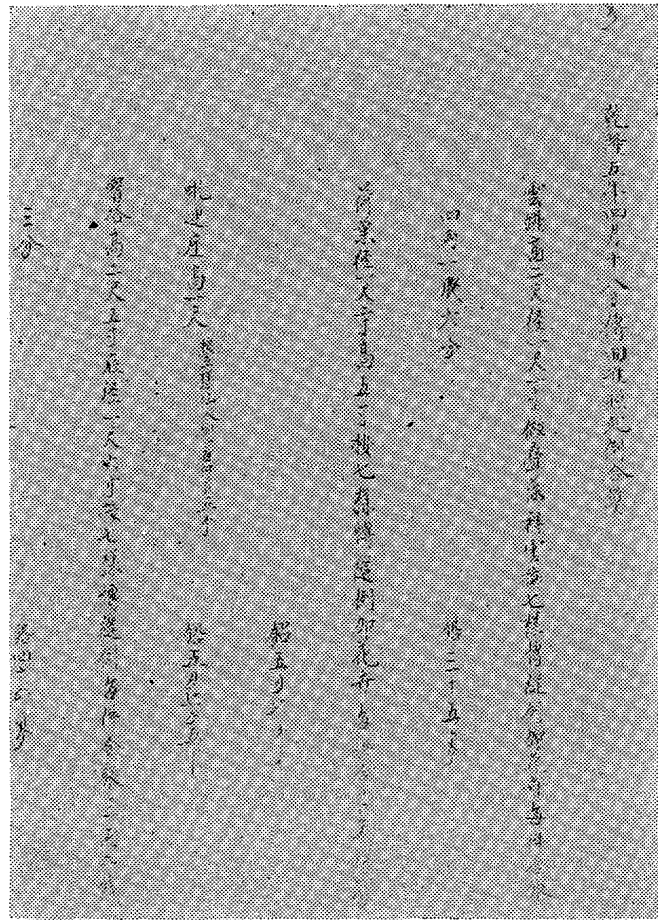


唐岱沈源合作 圓明園四十景圖 (パリー国立圖書館藏)

御製詩集第二十二卷に收載されているし、「圓明園後記」もまた御製文集の第四卷に収録されている。そして此の文集の跋には「乾隆己巳(乾隆十四年(望日))の記入がある。またパリー国立圖書館に收藏されている「唐岱沈源合作の「圓明園四十景圖」には「乾隆九年甲子九月奉勅臣唐岱沈源恭畫」という記



圓明園雜項則例



圓明園襍項價值例

ただと説明している。もしアッチレの記述に信を置くならば、雍正時代と乾隆時代の増築は乾隆帝の即位匆忙から開始された事実を證明すべ
でなかったと結論することができよう。そして圓明園の増築は乾隆帝の即位匆忙から開始された事実を證明すべ
き記録が、先年、同僚奥野信太郎君によって、偶然、北京で發見されたのである。

目下、この記録は慶應大學圖書館に儲藏されているので、私は之れを披讀する便宜を得た。この記録は言わば圓明園
築造工事の見積書とも言うべきもので、大工、石工、瓦工その他、専門の工人がそれ／＼官府に提出したものだと思われ
る。例えば「圓明園雜項則例」には左記の記載がある。

入がある。此らの典據から見て、圓明園の告成が乾隆治世の初期であったことはペリオ教授の指摘する通りだと思ふ。アッチレの圓明園に関する書信(譯文後出)は一七四三年(乾隆八年)の日附である。してみると当時、既に圓明園の廣益工事が殆んど完成したものと云わなければならない。またアッチレは其の書信に於いて、圓明園の築造大工事は康熙、雍正、乾隆の三代を通じて僅か二十年を出でず、中國の建築は材料を積み上げることに止まるし、また中國では工匠人夫を無限に使役することができら、かかる大宮殿の建築も此れほど短期間に完成し

今於乾隆元年五月初一日、辨磚瓦人張修翰具呈在案瓦一應琉璃脊瓦料所用蔬辯稻草並

また「圓明園襍項價值例」には

乾隆五年四月十八日傳回准照比例合算。

以上の年月から見て、圓明園の擴大工事は乾隆帝の即位匆々から開始され、また前掲の論據から、その工事が乾隆八年ごろ峻功したことが推定されるのである。

(II) 圓明園の風光と御製及び四十景詩

乾隆帝は圓明園の中に數多の新殿を建築したばかりでなく、圓明園を本園とし、近隣の暢春園、萬壽山、清明園を、その屬園としたのである。

「乾隆帝は圓明園の中に夥しい宮殿を増築されました。此らの新殿は舊殿よりも、皆、豪壯であります。

圓明園は大きい一村落であります。むしろ百萬人以上の人口を有する大村落の一群であり、その間に圓明園が位していると申すことができます。圓明園には色々の名稱が御座います。圓明園のすぐ隣にあって、皇太后の住われている離宮は暢春園と呼ばれ、暢春園に近い離宮は萬壽山と呼ばれて居ります。この離宮から少し離れた、もう一つの離宮は清明園と呼ばれて居ります。圓明園の中央に玉泉山と呼ばれる山が御座います。實際この泉が唯今、申上げた諸園に水を供給しているのです。その後で此の泉は北京まで運河を作って居ります。しかし乾隆帝が玉泉山の山上に豪華な殿宇を築かれて以來、此の泉は如何ほど水に富むとはいえ、以前の水量の半分しか供給しなくなりました。

(Troisième lettre de P. Benoit, Lettres édifiantes et curieuses)

光明正大という本殿には斯くの如く三二の造營物が附屬している。そして本殿は中路、東路、西路、北路にわたって約四十軒、並んでいるから、それに附屬する建物は可なり多数に達していたと思ふ。四庫全書を收藏する文源閣は北路に獨立していた。そして門の名を擧げれば、

- 1 出入賢良門
 - 2 福園門
 - 3 西南門
 - 4 藻園門
 - 5 餗餗門
 - 6 大北門
 - 7 大東門
 - 8 二宮門
 - 9 新宮門
 - 10 運料門
 - 11 西爽村門
 - 12 舊園門
 - 13 東樓門
 - 14 明春門
 - 15 綠油門
 - 16 蕊珠門
 - 17 秀清材門
- (國立北平圖書館の圓明園專號民國二二年五月—八月號による)

盛夏、北京の暑さは窒息的であり、殺人的である。故に康熙帝は熱河に避暑山莊を構築して、皇城の炎熱を遠い山間に避けられた。また雍正帝も乾隆帝も圓明園を以って避暑離宮として、萬機親裁の勞を忘れようと考えられたのである。しかし乾隆帝は此の離宮の擴張工事が告成すると、單に夏ばかりではなく、一年の大半を此の豪華殿で過ごされ、ただ祭儀執行の際だけ皇城に還御されたのである。当時、藝術家として在朝を許されていたフランス耶蘇会士ブノワは、次ぎのように述べている。

「乾隆帝は一年を通じて約三月の間、北京に住われるに過ぎません。この皇帝は通例、冬至の前に暫く北京へお歸りになります。冬至は何時も中國曆の十一月にあたる筈です。春分は何時も翌年の二月にあたります。一月十五日迄に、皇帝は隨員と一緒に、圓明園の離宮に行幸されます。この離宮は北京の西北、二公里の地にあります。皇帝が北京に三月間、いらっしやる間は、夥しい祭儀に臨御されなければなりません。その他の月日は、韃靼地方に出獵される時を除いて、圓明園でお暮らしになるのであります。そして一定の祭典が催される度毎に、圓明園から北京へ出御されるのであります。それで祭典がすむや否や、圓明園に還御されます。」(Troisième lettre du P. Benoist sans

date, Lettres édifiantes et curieuses.)

乾隆帝は当時、暢春園に常住されていた母考、秀聖憲皇太后を圓明園に迎えて、或は宴を催して、今昔の話に興ぜられ、或は國內を共に逍遙して、謂ゆる愛日の誠を重ねられた。そして当日の所懐を詩に歌われるのが常であった。また北京の紫禁城から圓明園へ還幸途次、眼前の景象に打たれて、その詩情を即詠し、殊に園内に駐輦中は、暮春、初夏、秋日、初冬、雨後の美觀を或は律に、或は絶句に歌はれたのであった。

御製詩集の跋によると、初集には戊辰（乾隆元年）から丁卯（乾隆十二年）にわたる御製、第二集には戊辰（乾隆十二年）から己卯（乾隆二十四年）に至る御製が収録されている。併せて二十四年間に乾隆帝は圓明園に関する詩を三十五首詠ぜられたのであった。帝の在位六十年、二十四年間に圓明園を主題とする詩、三十五首を製作された此の比率を乙卯後の在位年数に適用すれば、なお多數の御製のあることが推定されるのである。

いま御製詩集から、左の二詩を取りだして見よう。

新春恭奉皇太后幸圓明園 新春恭しく皇太后を奉じて圓明園に幸す

鳳城煙靄湊韻光 鳳城の煙靄、韻光をあつむ。

迤邐天街柳漸黃 迤邐として天街、柳漸く黄なり。

寶月行開上元夕 寶月、行開す上元の夕。

春風先進萬年觴 春風先づ進む萬年の觴

景物逾年倍可人 景物年を逾へて、ますます人に可なり

行時未敢弛虔宙 行時未だ敢て虔宙を弛めず。

瑤階凍草萌新綠 瑤階の凍草、新緑を萌す。

消息傳來有脚春

消息、傳へ來る有脚の春

暮春圓明園作

經句未倚畫欄邊

句を經て未だ畫欄の邊に倚らず。

婉々詔華頓可憐

婉々、詔華、頓に憐むべし。

四野雲低頻釀雨

四野、雲低く頻に雨を釀す。

一嵩水漲恰勝船

一嵩水漲って恰も雨に勝たゆ

茂竹修竹蘭亭景

茂竹修竹、蘭亭の景

煙縷暗絲上巳天

煙縷暗絲、上巳の天

暫遣幾間非玩物

暫く幾間に遣するは物を弄ぶに非ず。

羸將詩句答芳年

詩句を羸ちたして、もって芳年に答ふ。

さらに乾隆帝は圓明園の中から、本殿四十を選んで其の美觀を畫院出仕の孫祐と沈源に命じて、描寫せしめられたのである。かくて詩と繪畫とが一體をなして、藝術の極美を發揮するに至った。その一例を此処に引用してみよう。

碧桐書院

前接平橋。環以帶水。庭左右修梧數本。綠陰張蓋。如置身清涼國土。每過雨聲疎滴。尤足動我詩情（前は平橋に接し、環らすに帶水を以つてす。庭の左右に修梧數本。綠陰、蓋を張る。身を清涼國土に置くが如し。雨聲の疎滴するに過ふ毎に、尤も我が詩情を動かすに足る。）

月轉風廻翠影翻

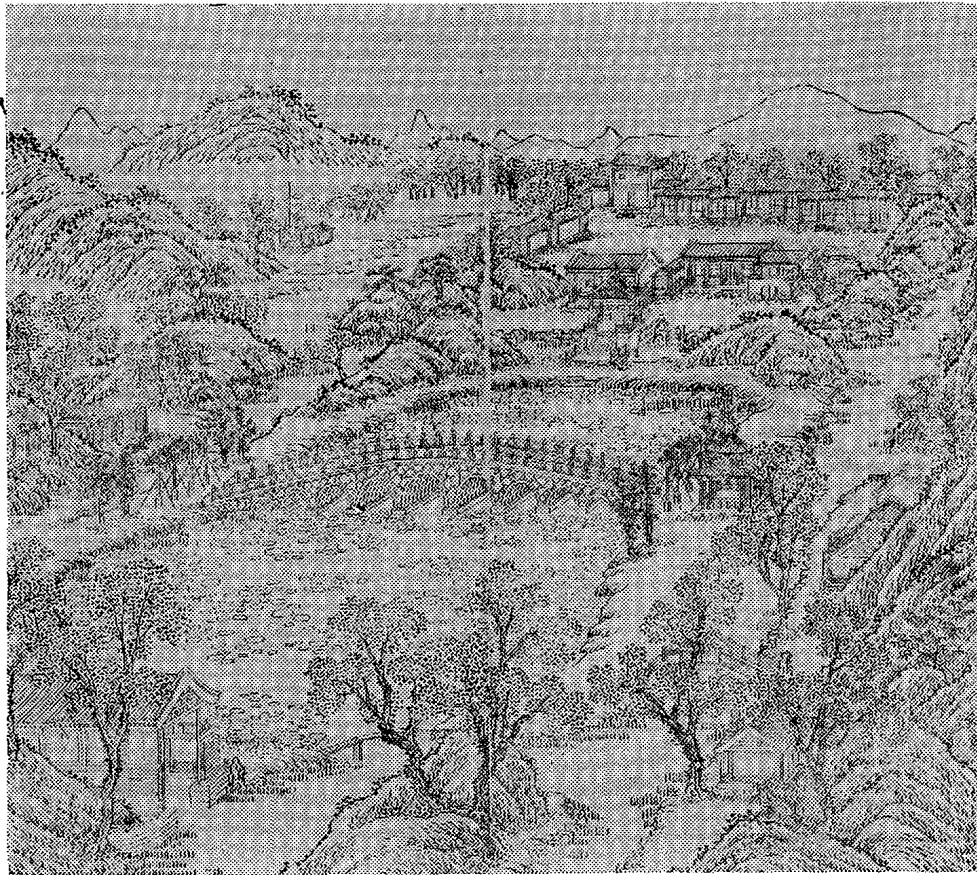
月轉じ、風廻って翠影翻る。

兩窗尤不厭清喧

兩窗、尤も清喧を厭はず。

即聲即色無聲色

聲に即し、色に即して、聲色なし。



幽蘭泛重荷

幽蘭、童荷を泛ぐ、

麴院風荷

莫問侏家獅子園 問ふなかれ、侏家の獅子園を。

麴院風荷

西湖麴院。爲宋時洒務地。荷花最多。是有麴院風荷之名。茲處紅衣印波。長虹搖影。風景相似。故以其名也。(西湖の麴院は宋時、洒務の地たり。荷花、最も多し。是に麴院風荷名あり。茲の處、紅衣、波を印し、長虹影を搖かす。風景相似たり。故に其名を以て之れに名づく。)

香遠風清誰解圖 香は遠く風清し、誰か圖を解せんや。

亭々花底睡雙鳧 亭々たる花底に雙鳧睡る。

停橈隄畔饒眞賞 橈を隄畔に停れば眞賞饒し。

那數餘杭西子湖 なんぞ餘杭の西子湖を數へん。

洞天深處

緣溪而東。徑曲折。如蟻盤短椽陋室、奧爲宣。雜植卉木。

紛紅駭綠。幽巖石厂。別有天地非人間。少南即前垂天耽。

皇考御題。予兄弟舊時讀舍也。(溪によって東すれば、徑、

曲折して、蟻の如く盤り、短椽陋室、奧を宣しとす。卉木を

雜植す。紛紅駭綠、幽巖石厂、別に天地の人間にあらざるあり。

少しく南すれば即ち前垂天耽なり。

皇考御題。予が兄弟、舊時の讀書舍なり。)

高柯慕憩樹

高柯、憩樹を慕ふ。

牝壑既虛寂

牝壑、既に虛寂。

細瀑時淙瀉

細瀑、時に淙瀉。

瑟瑟竹韻秋

瑟瑟、竹韻の秋。

亭々松月夜

亭々、松月の夜。

對此少淹留

これに對して少らく淹留すれば

安知歲月流

安んぞ歲月の流るるを知らん。

願爲君子儒

願くは君子の儒となり、

不作逍遙遊

逍遙遊をなさざらんことを。

(III) 圓明園に關するアツチレの記述

以上は乾隆帝自身が圓明園に關して殘した文献であるが、圓明園は禁園であつただけに、民間側の文献が見當らない。幸い當時、内廷に出仕していた宣教師の方面に、圓明園に關する文献が殘っている。それはフランス耶蘇會士アツチレが故國の友人に送つた書簡である。この書信は圓明園の配置結構、其の美觀を知る點から見て、最も詳細を極め、從つて最も貴重な文献と言わなければならない。私は此の書簡を譯出するに先んじて、アツチレ其人に就いて、聊か紹介の勞をとりたい。

當時、最も乾隆帝の寵待に浴していた西洋畫家はカスチリョーネであつた。(後章參照) 彼はポルトガル傳道團に屬していたから、この畫家を通じて、ポルトガルの勢力が清朝に浸透する虞れがあつた。それ故、フランス傳道團の宣教師は、フランス出身の畫家を清朝に派遣すべきことをフランスの耶蘇會本部に要請して置いたのであつた。この要請に

應じて、フランス耶蘇會士アツチレが一七三八年（乾隆三年）八月、北京に渡來したのであった。

彼は畫家として、宮中に出仕し、先づ王侯、寵臣の尊像を描き、次いで清朝に新附した韃靼諸王歡迎宴の盛觀をも描いた。この大作が特に叡慮に叶った結果、乾隆帝の尊影さえも作成する光榮に浴したのである。そして尊像を寫生中、侍従の勸告を容れて、龍顔を殊さら大きく描いたので、特別の叡感にあづかった。それで乾隆帝は彼を四等官に任じ、食祿を下賜されるべき内命を傳えられた。しかし彼は此の恩命を拜辭した。なぜなら彼は敬虔な信者であり、異教君主の臣下となることは宗教上の良心を裏切ると考えたからである。乾隆帝はアツチレが恩命を固辭した理由を聞かれて、その清徳に感心して、ます／＼寵待を賜った。

彼は後年、「得勝圖」（後章参照）の中で、下の三圖を描いた。和落霍漸之戰。阿爾楚爾之戰。凱宴成功諸將士。

當時、圓明園に出仕する宣教師は園の近傍、海甸の別舎に住み、茲から圓明園に毎日に出仕し、如意館に詰めていた。この如意館は圓明園の出入門、賢良門を這入って右折し、宮牆に沿うた最端の別殿であった。この別殿に中國の象牙工、畫工、寶石工、硝子工と一緒に宣教師のうちの畫工、時計師が働いていたのである。そして乾隆帝は彼等の働きぶりを御覽になるため、この如意館に出御されることが屢々であった。この皇帝は特に繪事を愛されていたので、カスチリョーネ、アツチレなどが尊影を描く時には、御居間のそばに畫室を賜った。

この圓明園は禁園であるから、宮嬪以外には出入することができない。しかし如意館に働いている宣教師は、職務上、此の禁園に出入する特權を持っていた。故に彼等の記述は實見に基づくから十分、信憑性を持つものと言わなければならない。故に私はアツチレの書信（Lettre du Frère Attiret de la Compagnie de Jésus, peintre de l'empereur de la Chine à M. d'Assaut. A Pékin, le 1^{er} novembre 1743. Lettres édifiantes et curieuses）を譯出す

るのである。

「圓明園は布置結構から見て、一切が雄大であり、ほんとに美觀であります。そして私は何處いづこに於いても、この離宮に類するもの一つも見ることがなかっただけに、その雄麗さにビックリいたしましたのであります。私は喜んで圓明園の記述を試みましよう。この記述は此の離宮に關する正當な觀念をお傳へするかも知れませんが、恐らく記述その者が困難に失するでありませう。それといふのも此の離宮の景觀には歐洲の建築法、建築様式に似通ふものが絶無だからであります。たゞ肉眼のみが圓明園に關する實觀のみを捉えることが出来るだけであります。それ故、若しも餘暇が御座いましたら、圓明園の景觀を精寫した繪畫を二三枚、必ずお手許にお送りしたいと存じます。この離宮は少くともヂジョン市 (Ville de Dijon) の大きさを持ってをります。(この都市は御存じの筈ですが、特にその名を申上げるのです。) 一般に圓明園の離宮は多數の本殿から成り立ってをります。この本殿は、それ／＼離れてをりますが、その離れ方にも美しい釣り合ひが取れてをります。そして廣い内庭と庭園と植込みとが本殿と本殿とを隔て、をります。どの本殿の前面も金箔、琉璃、色彩塗料でキラ／＼輝いて居ります。本殿の内部には本國産、印度産、歐洲産の最も美しい、最も貴重な什器が裝備されて居ります。此等の宮殿は離宮として魅惑的なものであります。どの宮殿も廣い地域を備え、この地域には築山があり、その高さは二十尺から五六尺に及んで居ります。かくて小さい谷が數へきれないほど出來て居ります。清らかな水を湛へたお堀が此等の谷底を流れ、數箇所會流して池と海とを作ります。人々は美しい豪華な船に乗って此等の堀や池や海を巡覽いたします。私は長さ十間、幅四間の豪華な樓船を見かけたことがあります。どの谷間にも、岸には五六棟の本殿、内庭、屋根の有ったり、無かったりする歩廊、庭園、植込み、瀧などで完全な釣合のとれた宮殿が配置されてをります。その結果、一目見ても、感心するほど美しい景色の組み合はせができて居ります。ヨーロッパでは美しい、眞直な谷間を辿って小さい谷から出ますが、此處では雁木形の路、迂路を通じて谷から出るものであります。これらの路も小亭や小窟に飾られて居ります。小さい岩窟の出口で、第二の谷にぶつかります。この谷は地形から見ても、建物の構造から見ても、第一の谷とは全く趣が違つて居ります。

どの山にも、どの岡にも樹木、殊に中國では極めて有りふれた花樹が一面に植わつて居ります。ほんとの地上樂園で御座います。お堀はヨーロッパで見かけるやうに切石きせきを眞直に並べたもので、縁ふちどられては居りませんが、石塊を無造作に並べたまゝで、縁ふちどられ、石塊が突きだしたり、引込んだり致して居ります。そして天工に出づるかと思ふほど、石塊が手際よく並べてあります。お堀は

廣くなったり、狭くなったりして、彼處でウネってゐるかと思ふと、此處では曲つてゐます。ですからお堀が小山や築岩のために本當に押し出されてゐるかと思はれます。お堀の岸には築岩の上から咲きだした花が、此處彼處に咲き亂れて居ります。その花は築岩の上に咲いてゐても、天工のように思われます。四時を通じて季節の花が咲いてゐるのです。お堀のほかにも、どこにも路があり、もっと適切に申せば細道があります。小砂利を敷きつめた此の細道は谷間から谷間に通じて居ります。どの細道も時にはお堀の岸に沿ひ、時には岸から遠ざかるのであります。

谷に着きますと、建物が目にとまります。建物の前面はブラリと並んだ柱と窓とででき上り、棟木には金泥、繪具、琉璃をかけ、薄黒い磚の塙が直立してゐて、よく艶やが出て居ります。屋根は赤、黄、青、緑、紫の琉璃瓦に葺かれ、琉璃瓦の混在と布置とが區劃と構圖の快適な變化を作り上げて居ります。これらの建物は殆んど皆、平屋建てであります。そして地上から二尺、四尺、六尺、八尺ぐらゐの高さに過ぎません。建物の中で、二三のものしか二階を持っていないのです。まして藝術的に出来上つた石階によつて此の御殿に登るのではありません。天然の階段とも思はれる岩を踏んで登るのであります。沙漠の眞中で岩道が峨々として聳えて、蜿々と續く岩窟の上に仙女の靈宮が築かれて居りますが、この靈宮にも、圓明園の宮殿と似通ふものは御座いません。殿内の廣間は外觀の豪華と完全に一致して居ります。家具と裝飾品の配置が好いばかりでなく、その家具も裝飾品も素晴らしい趣味のものであり、非常に高價なものであります。内庭にも、通路にも大理石や陶器や銅で作つた花瓶が置かれて、花が一杯さしてあります。こういう二三の御殿の前面には威張つた石像の代りに、青銅製もしくは銅製の人像や象徴的な獸像が大理石の臺座の上に飾られてあります。香爐も同じく大理石の臺座に載せてあるのです。

前に申し上げた通り、到る處の谷の上にも宮殿が立つて居ります。此等の宮殿は圓明園の全面積に比較すれば小さいものに違ひありません。併し宮殿自體はヨーロッパの大諸侯と其の隨員とを宿泊させることが出来るほど廣大なものであります。此等の御殿の中で數軒は北京を距ること五百公里の地方から、巨費を投じて引き出してきた杉材で建築されて居ります。併し此の廣い園内の、それぞれ違つた谷間に、どれだけの宮殿があると思し召になりませうか。宦官を住はせておく二百餘の建物は別に、同じく二百以上の御殿があるのであります。なぜ宦官の住宅があるかと申しますと、これらの御殿の番人をつとめてゐるものは彼等だからであります。宦官の住宅は何時も宮殿から二三間ばかり離れた處にありますが、かなり粗末な住宅でありまして、その粗末だといふ理由から宮牆の末端により、或は築山で隠くされて居ります。

お堀には處々、橋が架つてをります。それは一處から他處への交通を便利にするためであります。此等の橋は通例、磚や切石で築かれ、二三の橋は木造であり、いづれも自由に船が通れるだけの高さを備えて居ります。どの橋にも藝術的な浅い浮彫細工を施した白大理石の欄干が着いて居ります。そののみか、橋の形もそれ〴〵常に違つて居ります。橋が眞直に架つてゐると、お考へになつては可けません。それどころではないのです。曲つたり、クネつたりしてをります。それ故、或橋が眞直であつたなら、三十尺もしくは四十尺を出づることが出来ないのに、曲りくねらせて置くので、百尺もしくは二百尺の長さを持つことが出来るのであります。中央あるひは末端に休憩用の小亭の附いてゐる橋も見受けられます。この小亭は四本、八本もしくは十六本の柱で支へられて、普通最も見晴らしの好い橋上に立つて居ります。その他の小亭は木造の牌樓ハイコウまたは大理石製の牌樓の兩端にあります。牌樓の構造は極めて美しく、歐洲人の觀念とは全然、かけ離れたものであります。私は御堀が池すなはち海の中に流れ込むと申し上げました。ほんとに東西南北から測つても直径半里に近い池があります。この池には海といふ名がついて居ります。この池のある處が圓明園の眺望絶佳な場所であります。この池畔には處々、宏壯な本殿が立ち、その本殿同士が前にお話して置いたお堀や築山によつて隔てられて居ります。しかし本當の絶景は小島であり、寧ろ奇峭な、野趣に富んだ形の岩礁であります。この岩は北海の眞中で、水面から約一間ばかり浮んでゐます。この岩の上に小さい御殿が立つて居ります。小さいとは申しながら、この御殿は百餘の部屋もしくは客間を數えます。この御殿は四面を持ち、到底、お話しが出来ないほどの美しさと趣味とを兼ね備へて居ります。その景觀は素晴らしいものであります。この島からこの池の岸に散在する宮殿が悉く見えますし、この池を盡頭とする山々、水を運んだり、此の池へ流れ込んだり、或は此の池から流れだす爲に、この池に達するお堀、お堀の盡頭ハツブタか、または其の入口にある山々、これらの橋を飾る亭、牌樓、同じ方面の宮殿がお互に見えないやうに宮殿を隔てたり、覆ひかくしたりする森、かういふ一切の景觀がこの島の中から一眸のうちに收められるのであります。

この美しい池の岸は果てしなく變つてをります。一箇所として他に似た處はありません。こちらでは歩廊、細道、通路が集つてくる切石の河岸が見え、あちらでは有らゆる技巧を凝らして一種の階段に作り上げられた築岩の河岸が見え、更に美しい覽臺が見えます。覽臺は建物を支へてをりますが、覽臺の各側面に階段がありまして、その建物に登ります。これらの覽臺の上部には椽敷形の御殿を載せた他の覽臺が立つてをります。餘處よそに瞳を轉ずると、花樹の林が目に入ります。それから少し離れた所に野生林があり、これらの樹木は最も人氣ひとけのない山上に生ひ繁るばかりであります。建築用の巨樹、異邦樹、花樹、果樹が目にとまります。

この同じ池の渚で澤山の檻かごや亭ていにも出逢ひます。この檻と亭とは半ば水に浸り半ば地上に出てゐるもので、諸種の水禽が飼つてあります。それと同じく地上では時々、小さい家畜飼養場と狭い獺園に出逢ひます。中國人は特に一種の金魚を賞玩いたしてをります。ほんとに銀まだら、紺、赤、緑、紫、黒、麻色、灰色の金魚、また斯ういふ色の一緒に交ざつた金魚がありますが、中國人の愛する金魚の多くは、黄金と同じほどキラ／＼輝く金魚なのです。庭の中に數種の金魚池が御座います。最も廣大なものは次ぎのものであります。それは池中いけうちに金魚が散らばらないやうに、極めて細い銅線をめぐらした廣い空間であります。

最後に此の場所だけの美觀を限なく理解して戴くためには次ぎのやうな場合に、貴下を此處へお連れ申すことが出来れば好いと存じます。それは水上逍遙、釣魚、競技、槍仕合、その他の遊戯を行ふために、この池上に金泥畫彩の船が充滿する時、殊に清夜、火花をあげ、諸方の宮殿樓閣や、全部の船や、殆んど全部の樹木に灯を點する時であります。なぜなら灯火飾と火花にかけてはヨーロッパ人は到底、中國人に及ばないからであります。私は極く僅かな火花を見たわけではありますが、中國の灯火飾や火花の方がイタリイやフランスで見かけた此の種のものよりも遙かに勝れて居ります。

皇帝、皇后をはじめ貴妃、妃、嬪、貴人、常在、室婢、宦官の平生住む場所は、建物と内庭と庭園との廣大な組合せであります。一言すれば少くともフランスの小市ドル(Dole)の大きさを有する一都市であります。その他の宮殿は殆んど散歩と晚餐と夜餐のために過ぎません。皇帝の常御殿つねごてんは入口の御門の直ぐうしろで、表御殿、謁見の間、内庭、庭園の直ぐうしろに當つて居ります。この御殿は島を作つてをります。四方、廣い、深いお堀に取り巻かれて居ります。この御殿をトルコの後宮と呼ぶことができます。家具、裝飾品、繪畫(中國趣味の)、銘木、中國や日本の漆器、古陶の花瓶、絹織物、金繡、銀繡の如き天下第一の逸品が見かけられるのは常御殿のお部屋の中であります。この部屋の中にこそ藝術と善き趣味とが自然の富に加工し得るものが一切、集つてをります。圓明園の眞中に小さい町ができて居ります。この常御殿から、道が殆んど眞直に一つの町に續いて居ります。この町は全園内の眞中に立てられたもので、四方にわたつて、四分の一公里の廣さを備えてをります。そして東西南北に四つの城門、塔、城壁、胸壁、銃眼ができて居ります。また町通り、廣場、寺院、中央市場、普通市場、商店、官廳、裁判所、港などが備わつて居るのであります。要するに首府の北京で大形にでき上つて居る建物、圓明園の此の町では、すべて小形にでき上つて居るのであります。貴方は、何にもかも狭苦しく、従つて非常に粗雑な此の町が、どういふ用途を持つのかとかお尋ねにならずにはいられますまい。國家に不詳事の起つた場合もしくは叛亂、革命の起つた場合に、陛下が安全の地を見いだすためではないのか、この町には、こういう用途があるかも知れ

ません。そういう考は、圓明園内に此の町を建設させられた陛下の叡慮に潜んでいたかも知れません。しかし其の主要な動機は、ある大都會の喧噪を御覽になりたいと思し召される度毎に、その雛形を親しく御覽になる樂しみを味いたい爲めでありました。なぜと申せば天子は尊嚴な餘り、出御の際に庶民にお姿をお見せになりませんし、陛下もまた庶民を御覽にならないからであります。御覽になるものは何にもないのです。どの家も、どの店も何もかも締って居ります。お姿が人目にとまらないように、到る所に天幕が張りめぐらしてあります。御通過の數時間前から、御通路に佇むことは、何人にも許されて居りません。そんなことをすれば護衛から酷い目に逢います。城外に出て田舎道に差し掛ると、二列の騎兵が人垣を作って兩側から、鹵簿より遙か先頭に進んで參ります。それは道筋にあたる人々を遠ざけると同時に、玉體の安全を計るためであります。かように皇帝は、一種の孤獨の環境に御生活なさらなければならぬので、中國皇帝は至尊の御身を以つては到底、味えない大衆的快樂を、色々工夫算段して、埋め合せたり補ったりしようと、いつも御苦心なさっていらつしやるのです。

この町が建てられたのは先帝の御代で御座いました。この御代に於けると同じく今上陛下は、一年に數回、宦官を使って、大都會のあらゆる商賣、取引、技術、職業、喧噪、詐偽的行爲を演出せしめるのであります。當日になりますと、どの宦官も、指定通りの身分、職業に姿をやつします。彼等の中には商人になる者もありますし、職人になる者もありますし、また兵卒、將校になる者も御座います。ある宦官には手押車を渡し、他の宦官には脊負籠を渡します。結局、各自、職業上の特徴を持つのであります。船が港に着きますと、店が開かれます。商人が商品を並べます。ある區域は絹物、他の區域は麻類、ある町筋は陶器、他の町筋は塗物類と皆地割がきまつて居ります。ある商店では家具類、他の商店では衣類、婦人の裝身具、次ぎの店では好事家、學者用の書籍が見つかります。そして茶屋あり、酒家あり、またどんな身分の人でも泊れる旅館が御座います。立賣商人があらゆる菓物や飲みものを御客に見せつけます。雜貨屋がお客の袖を引き、ウルサク付き纏って、商品を賣りつけようと致します。當日は何をしても關いません。また皇帝と賤民との見境が御座いけません。どの商人も持っている品物の名を呼び立てます。立賣商人が喧嘩を始めて殴り合いになります。紛れもない市場の喧噪です。羅卒が喧嘩の當人を捕えます。喧嘩の相手同士は裁判所の判事の許に護送されます。喧嘩は調べられて、裁判が行われます。答刑が宣告されます。その宣告が審査されて、實施されます。時には冗談から駒が出て、罪人に取つては、本物ほんものすぎるほんものことがあります。それも叡慮に叶うためなのです。

この催しにはスリも忘れられては居りません。こういう下司な役目はズバ抜けて素ばしっこい宦官に任せられますが、この連中

は物の見事に、この役目を果たします。スリは其の場で、つかまると恥をかきます。罪の輕重により、或は盜品の性質によって、入墨、笞刑、所拂ひが宣告されます。もしスリがマンマとスルならば、見物人がスリの味方になって、スリが拍手喝采を浴びます。そして可哀そうにスラれた商人の訴えが却下されます。しかし此の催しが濟むと、盜品が、もとの人手に返ります。

先きに申上げた通り、此の催しは、ただ皇帝、皇妃、皇嬪のお歡びのために行われるものであります。それ故、此の催しには王侯貴人を二三名すら入場させることは滅多にないのであります。もし王侯貴人が入場するならば、皇帝と宮嬪との退場されたあとに限るのです。この町に並べて賣り捌かれる商品の最大多数は北京商人の手持品で、此らの商人が宦官に本當に賣ってくれと頼んだのであります。ですから取引はウソイツワリではなく、眞似ごとでもないものであります。皇帝はいつも澤山、お買上げになります。そして商人達ができるだけ高く皇帝に賣りつけることは、お疑いにならないでしょう。貴嬪も買上げますし、宦官も買います。こういう取引が本物であればこそ、利害觀念が益々募って、騒ぎも益々盛んになるのです。もし商賣が本當でなかったら、利害觀念が薄らぐ筈で御座いましょう。

商賣のあとで、時折、農耕の祭儀が行われます。この同じ境内に、此の祭儀にあたられた地域が御座います。此の地域には田畑、牧場、住宅、農家が見かけられます。牛、犁、その他の道具が全部揃って居ります。麥、稻、野菜をはじめ、有らゆる穀類の種子を蒔きます。收穫物を取り入れ、果實を摘みとります。要するに田舎の行事が全部、茲で見かけられるので御座います。そして出来るだけ田園の質朴さと田舎生活の風儀を眞似するのであります。

中國には元宵觀燈祭と呼ばれる有名な祭典のあることは既にお讀みになった筈だと存じます。この祭は一月十五日に催されます。當日、堤灯を掲げないほど惨めな中國人は御座いません。色々な形、色々な大きさ、色々な値段の提灯を作って賣って居ります。その日、中國全體が灯火に輝くのです。どこへ行っても皇居ぐらい灯火飾の美しい所はありません。特に唯今、お話し致している圓明園の離宮に於いては、天井から數個の灯籠が吊り下がらない部屋も廣間も廊下も御座いません。どの堀割の上にも、どの池の面にも灯籠が浮んで、宛ら小舟のように、漂いながら、往ったり來たりして居ります。どの山にも、どの橋の上にも、殆んど有ゆる樹の上にも、灯籠が吊してあります。灯籠は皆、魚、鳥、動物、花瓶、果實、花、船の形をして、あらゆる大きさを備えた名作であります。それは絹、角、硝子、螺鈿などの材料からでき上って居ります。畫をかけたたり、縫取を施したりして、あらゆる値段のものがあるので御座います。千金を投じて、到底、作られないものを見かけたことがあります。灯籠の形や、材料や、裝飾をお話いたそうと

したら、切りが御座いませぬ。私が中國人の意匠に富むことに感心するのは、此の點から御座います。また其の建築様式が多岐多様にわたつてゐることでもあります。

それ故、自國の建築様式に見なれた中國人の眼は西洋の建築様式を餘り鑑賞いたしません。彼等に西洋の建築様式を説明したり、西洋館を描いた版畫を見せたりすると、彼等は何んと申すか御存じになりたいでしょうか。あの堂々たる本殿、あの亭々と聳え立つ樓閣に、中國人は恐れをなしてゐるのです。彼等は西洋の町通りを、恐しい山中に穿たれた道路と見なし、また西洋館をば、熊やその他の猛獸の棲みかと同じく、穴を穿った、遙か遠くに見える巖石のように考へてゐるのです。殊に西洋の階層造りは、累々、層をなしてゐるので、到底、住むに堪えないと考へてゐるらしいのです。五階もしくは六階へ昇りながら、日に幾度も頭を割るような危険を冒すのか、彼等には其の譯が解らないのであります。康熙帝は西洋館の圖を御覽になつて、次ぎのように申されたことが御座いました。

「西洋では、都市を擴げるだけの地面がないし、人間が空間に住まなければならぬから、西洋は至つて狭く、慘めなものに違ひない。」

我々の結論が此の皇帝の結論と聊か違つてゐることは當然な話で御座います。

さりながら私はヒーキ目から判斷しようとは考へて居りませんが、中國の建築様式が大そう私の氣に入つてゐる次第を包まず申上げましょう。私が中國に渡來して以來、私の眼も趣味も中國化したしました。内輪のお話ですがチュイルリー王宮の眞向いに立つてゐる公爵夫人の御屋敷は至つて美しいと思召しませんか。しかし此の館邸は殆んど中國風では御座いませぬか。それは殆んど平屋建に過ぎませぬ。各國、獨自の趣味と建築様式を持つて居ります。西洋の建築様式の美しさを認めずには居られません。西洋の建築様式ほど宏壯なものは御座いませぬ。西洋館の方が便利であることは否定できません。我々、西歐人は到る所に劃一と對稱とを求めます。聊かも不揃ひな、ズレのないことを望み、ある一部が他の一部とさし向い、或は對立して、他の一部と正確に對應することを欲するのであります。中國に於いても、そういう對稱、美しい秩序、配置が望まれて居ります。この手紙の冒頭で申上げた北京の宮殿は、こういう趣味によるものであります。また王侯の宮殿、官廳、やゝ富んだ個人の住宅もまた此の様式に従つて居ります。

しかし離宮では殆んど到る所、美しい亂雑すなわち非對稱の支配することが、中國人の望む所であります。すべての様式が次ぎの原理を核心と致してゐるのです。その原理とは「建築家の表現したいのは、野趣の溢れる田園であり、孤獨の地境である。對稱と調和の諸規則から見て、整然と形のとのつた宮殿ではない。」ということでもあります。

それ故、圓明園の構内では、本殿が互に可なり長い距離を置いて築造され、互に少しも似通った本殿は一つも見かけたことがないのであります。どの本殿も或る異國の意匠とモデルに基いて構築された氣がしますし、一切の建築が設計なしで置き据えられ、また工事のすんだ後で、付け加えられた氣が致すのであります。この説明を聞く方は、これは可笑しい、一見、不快な感じがするだろうと想像されることでしょう。しかし實見してみると、却って考えが違つて參ります。こういう不調和を巧みに取りさばく技術に感心するのであります。何にもかも善き趣味であります。全體の美しさが一目では目につかないほど、上手に處理されているのです。一々、檢べて見なければなりません。長い間、心を樂しませたり、好奇心をスツカリ満足させるだけの趣があるのであります。

これらの本殿は郊外の別莊という言葉で云い現わすことができるにしても、單にそういう別莊では御座いません。昨年、圓明園の中に小さい御殿の建築されるのを見かけました。それは康熙帝の從兄にあたる親王の建てられたもので、内部の裝飾と家具は抜きにして、四百五十萬ウーアンの費用が掛りました。その裝飾と家具とは、此の親王の自辨ではありませんでした。この離宮を支配する素晴らしい多様性に就いて、さらに一言を加えたいと存じます。その多様性は本殿の位置、外觀、大きさ、高さ、數の中に存するばかりでなく、一言すれば其の全體を構成する雑多な部分の中にも存するのであります。色々な作り方、様々な形、すなわち圓形、隋圓形、四角形、多角形、扇形、花、花瓶、獸、魚の形、要するに揃った形、不揃いな形の門や窓を見るためには、私に取つては當地に渡來する必要があつたのであります。

次に廻廊のことをお話しようと存じますが、こういう廻廊を見るのは、當園だけに限ると信じて居ります。此の廻廊は互に可なり離れている本殿と本殿とを繋ぐ役目を致して居ります。そして廻廊は時折、内部は透かし彫、外部には、それと違つた形の窓が穿たれて居ります。窓には皆、透かし彫が施してあります。それは四方、開け放しの亭へ御殿を繋ぐ廻廊と同じことで御座います。この亭は納涼に當てられるものであります。そして珍らしいことは、これらの廻廊が殆んど直線を取っていないということであり、そして廻廊は時々植込みの後を通して、時には巖のかけ、時には小さな泉水の裏をいろく曲がりくねつて居ります。これほど氣持の好いものは御座いません。この建築法には人の心を魅すものとが御座います。

私が今迄、申上げたことから見て、この離宮の建築には莫大な費用を要したに違いないと結論されずには居られません。それも當然な話で御座います。かくの如き費用を拂ひ得るもの、しかもこれほど短日月の間に、かほど驚くべき大計畫を實行し得るものは、實際、中國の如き大國家の主人たる君王を除いては、他に存在しないのであります。という譯は、此の離宮は僅か二十年間の工

事であり、此れを起工されたのは、今上帝の父考であり、今上帝は之を増築して、美化したに過ぎないのであります。

しかし此の點に就いては、少しも驚かれたり、不審に思われたりする筋合がないのであります。それは建物が總て一階建であるばかりでなく、労働者を無限に増加することができるからであります。建築材料を其場に運んで來さへすれば、即座にでき上るのであります。置き据えさへすれば宜しいので御座います。二三ヶ月、工事を續ければ、建築の半分は終つてしまいます。美しい谷間に、または山裾に、魔法がかりで忽然とでき上った御伽噺めいた御殿のような氣が致すのであります。それに此の離宮は圓明園と呼ばれて居ります。乾隆帝のお持ちになるのは、この離宮ばかりでは御座いません。皇帝は他に同じ趣味の離宮を三つ持つていらして居ます。しかし此れらの離宮は圓明園よりは小さく、さほど美しくは御座いません。そのうちの一つは、祖考康熙帝の建てられたもので、現在でも母后が、その朝臣と一緒に住われて居ります。この離宮は長春園と呼ばれて居ります。そして宗室と大諸侯の離宮は、皇帝の離宮の縮圖に過ぎないのであります。

こんな長つたらしい私の起述が何の役に立つかと仰有るかも知れません。この豪華な離宮の見取圖を作成した方が増しだったかも知れません。しかし此の見取圖を作るには、少くとも三年間はかの仕事をやめて、これに専心しなければならぬとお答えいたしません。ところが私には自分の時間が一刻もありませんし、お手紙を書くためにも睡眠時間を割かなければならぬのです。それに圓明園に這入りたいと思う度毎に、また必要時間だけ、此の園内にとどまりたいと思う度毎に、許可を得ることが必要でありました。私に繪心のあることが仕合せです。畫才がなければ、他の宣教師と同じく、二十年、三十年、當地に滞在しても、此の離宮には、まだ足を入れなかつたかも知れません。

中國には、ひとりの人間しか居りません。その人こそ皇帝であります。

すべての歡樂は、上御一人の爲に行われるのであります。この豪華な離宮を目にするものは、皇帝、嬪妃、宦官のほかには、殆んど一人とないのであります。皇帝は王族も諸侯も謁見の間にお通しになるだけで、それより先きの室内やお庭にはお通しになりません。當地に滞在している宣教師の中で、必要上もしくは職務上、到る所に接近するものは、畫家と時計師ばかりで御座います。私達が普段、晝をかく場所は、前にお話し致した小殿の一つ如意館であります。殆んど毎日、皇帝は私どもの働さぶりを御覽にならうとして、出御されるのは、この御殿であります。だから留守にすることができません。私達のかくものが運搬できないものでない限り、私達は如意館より先きには参りません。此の小殿より先きに参る場合には、役人から案内されて、また澤山の宦官が附いて参ります。私

どもは悪い事でもするように、爪先立って、音も立てずに、急いで歩いて行かなければなりません。こうして私は圓明園の美しい庭園を眺めたり、駆けめぐったりしたのであります。どの御部屋にも這入りました。皇帝は毎年、十ヶ月間、圓明園に滞在されます。この離宮と北京との距離はパリとヴェルサイユの距離に匹敵して居ります。私達が圓明園にいる間は皇帝の御馳走になります。夜は圓明園に近い可なり大きな町、むしろ村の中に宣教師の買いつた住宅に歸ります。皇帝が北京へ還御の節は、私達も北京に歸ります。そのときは皇居の内部に居りますが、夕方、我々の教會へ歸るのであります。」

アッチレと同じく乾隆帝に奉仕していたフランス耶穌會士ブノワは一七六七年（乾隆三二年）祖國の友人に送った書信（*Lettre du P. Benoit à M. Papillon d'Auteroche, A Paris, le 17 novembre 1767.*）の一節で、圓明園の景觀を紹介している。この紹介はアッチレの記述よりも遙かに簡略であり、言はば其の内容を要約したものである。この内容が利用できるであろう。しかし二人とも圓明園の實見者であるから二人の記述が共通の内容を有することは、その内容の眞實性を實證するものであると同時に、圓明園その者の豪華宏壯をも立證するものでなければならぬ。故にブノワ書信をも譯出してみよう。

「中國人は庭園の裝飾にかけては、天工を完成する技術を用います。その技巧は非常な成功を示して居ります。それ故、造園家たるものは、自己の技巧が、その痕跡を示さずして、しかも自然を、よりよく模倣するに至らなければ、賞讃を博することができないのであります。

ヨーロッパでは路が遙々、見えなくなるまで、續いて居ります。また物見臺に登れば、遠方の物が澤山見渡せられ、その景象が夥しいので、特殊な景物に氣を入れることができません。しかし中國では趣が違って居ります。中國の庭園では眼が少しも疲勞いたしません。なぜと言えば眼が視力の範圍と比例するだけの視野に制限されているからで御座います。人は全景の一部を觀て、その美しさに打たれ、これに魅惑されるのであります。それから數百歩、足を運ぶと、新しい景物が眼前に現われてきて、またもや感心するのであります。

圓明園は、色々、違つたお堀で區切られて居ります。そのお堀は築山の間を蜿々と流れ込み、あちらこちらで、岩の上を流れて、

瀑布を作ります。時には谷と谷との間に集って、池を作ります。その池の廣さによって、湖とか海とか名づけられて居ります。これらのお堀と池との岸は亂雑であり、畦に覆われて居ります。しかしこの畦はヨーロッパの畦とは大いに趣を異にして居るのです。ヨーロッパでは畦に非常な細工を加えて、野趣を隠くします。ところが圓明園の畦は天然石と思われる岩からできていて、その岩も柱を土臺にして巖文に積み重ねられて居ります。時折、石工が其の畦石に長い間、加工するのは、その畦石の亂雑さを増大して、一段と野趣を加える爲にほかなりません。

お堀の岸では、色々な場所に、乗船の便宜を計るために、石段ができて居ります。水上を逍遙しようとして、船に乗るとき、石段が大そう乗りよく積み重ねてあります。山上では、これらの石が、遠く見渡すと、岩の形をするように裁ち切られています。また時には、この岩はドッシリ据っていても、今にも落ちそうな氣がして、岩に近づくと、壓し潰されるかと思はれることも御座います。時には石が洞窟を作つて居ります。その洞窟は蜿々、山上を繞つて、快適な宮殿に導きます。水邊でも、山上でも、岩山の間天然のものらしい穴があいて居ります。その穴の中から、大木が生えだしているのです。また他の場所では、灌木が生え出して、その灌木が季節には、とりどりの花で一面に覆われて居ります。また他の場所では、季節によって植えかえなければならぬ花卉や草木が色々目にとまります。

皇帝と廷臣の住居にあてられている御殿は廣大な地域を擁し、此の御殿の中には天下の美を盡した珍寶が蒐められて居ります。この宮殿を除いて、園内には猶、夥しい御殿が立つて居ります。ある宮殿は廣い池のほとりに立ち、他の宮殿は池の眞中に拵えた小島の中に立つて居ります。また他の宮殿は、ある山の傾斜の上に、或は氣持の好い谷間に立つて居ります。麥、稻、その他の穀物を保存する場所が二三、見られます。田畑を耕したり、種子を植えたりする為に、村落が二、三箇所立つて居るのです。そして此の村の人達は、絶対に自分の住んでいる村から外に出ません。また商店の立つている村らしいものと目にとまります。これらの商店は、一年のそれ／＼違った季節に、中國産、日本産、ヨーロッパ産の最も貴重な品物を市場のように集めてくる役目を致して居ります。

圓明園は、ただ皇帝と朝臣とのために存在するものであります。なぜと申せば當地はフランスと違ふからで御座います。フランスでは王侯貴人の宮殿も庭園も開放されて、殆んど公共的であります。ところが北京では親王、王族、大臣、大官すら、何人も此の園内に一步も踏み入れることができないのであります。ただ宗室だけが這入れるばかりです。時には或る觀劇、時には或る觀もののために、皇帝が王族、もしくは朝貢國の君主を園内に招待されます。しかし彼等はただ招待された場所に案内されているだけです。しかし其場を去つて、他の場所を見に行くことは絶対に許可されないのであります。」

フランス王兄の文庫係を勤めていたグロジエ師 (L'abbé Grosier, bibliothécaire de son Altesse Royale Monsieur et administrateur de sa bibliothèque à l' Arsenal) は中國文化に對して深甚な興味を懷いていたから、常に北京在住の耶蘇會士と連絡を保ち、彼等と書信を交換したり、その研究を閲讀したりしていた。現にド・マイヤ師の「支那通史、通鑑綱目」(De Mailla, Histoire générale de la Chine ou Annales de cet empire, traduites du T'oung-kien-kang-mou, par le feu Père de Mailla, 13 vol. 1777~1785) の刊行に關して、斡旋の勞を取ったのは此のグロジエ師であった。なお彼には「支那通誌」(De la Chine, ou Description générale de cet empire, rédigée d'après de la Mission de Paris. A Paris, 7 vol. 1817~1820) を編纂して刊行した。

この書の第七卷に、圓明園に關する記述が發見されるが、その内容は主としてアッチレ書信に基いているから、茲では割愛することにしよう。

(IV) 圓明園に西洋樓と噴水の築造

宣教師が中國に渡來した目的は、福音宣傳にあったことは申すまでもない。しかし中國には遠い昔から儒教、佛教、道教が信奉されていたから、中國政府はキリスト教を異端の邪教を見なして、所謂、天主教を排斥したのである。殊に宣教師に政治的陰謀ありという風聞が流布されると、政府は異教の禁令を強化して、宣教師の行動を監視していた。

しかし宣教師は單なる傳道師ではなかつた。彼等は一流の科學者であり、また藝術家であつた。殊に中國は昔から天文曆數の進歩を誇っていたにも拘らず、中國天文學の缺陷が宣教師によって實證された。故に中國政府は初めて洋曆を採用し、また欣天監正(天文局長)同監副に宣教師を起用したのである。

殊に康熙帝は西歐天文學を敬重したばかりではない。帝は宣教師を侍講に擧げて、西歐の數學、特に幾何學を實習し、醫學、解剖學、化學をも習得されたのである。

康熙二八年（一六八九）フランス耶蘇會士ジェルビヨン（Gerbillon）とポルトガル耶蘇會士ペレイラ（Pereira）とは、通譯として清國全權索額圖ソエトに隨行し、ネルチンスク會商に参加した。そして黒龍江問題に關して、清露談判が決裂に瀕したとき、兩宣教師は居中調停の勞をとって、清露全權の主張を緩和し、遂に清國側に有利な條約を締結させることができた。康熙三一年（一六九二）、帝は宣教師の奉仕を多とし、また國家に對する外交上の忠誠を嘉みして、天主教の禁令を解除した。かくて中國々民は此の異教に入信することができたのである。

康熙三二年（一六九三）、帝は偶々瘧おこりを疾った。そしてフランス耶蘇會士の献進したキナ劑を飲むと忽ち高熱が下つて、一日にして快癒した。それ故、帝は彼等の功勞を賞して、西安門内に廣廈を賜い、之れを教會に改築せしめられた。これが北堂であり、東洋第一の壯麗な會堂であった。今までポルトガル耶蘇會士の教會、南堂（宣武門内）に同居していたフランス宣教師は此の北堂に移轉して、漸く生活の自由を勝ち得たのである。

康熙四七年（一七〇八）康熙帝は中國地圖の作成をフランス耶蘇會士ブーヴェ（Bouvet）ド・マイヤ（De Maille）ンジス（Régis）シャルトウ（Jartout）の四師に命じ、この事業のためには、經費を惜しまざる旨を傳えた。宣教師は諸省の地形を實測し、約八年を経て、遂に此の大事業を終えた。これが有名な「皇輿全覽圖」である。かくて中國皇帝は初めて自國の全貌を正確に知ることができたのである。

康熙帝は無論、天主教には好意を懷かれていなかったが、國家の運営上から見ても、個人的享樂という立場から見ても、西洋の科學文明を必要なりと考えられていた。さればこそ帝はキリスト教を解禁したのであった。けれども宣教師

側から言えば、福音宣傳が本來の目的であり、また彼等の使命であった。彼等は此の目的を達成せんが爲に、科學知識を利用したのに過ぎなかった。それ故、康熙帝の立場と宣教師の立場とは全然、食い違っていた。康熙帝から見れば、西洋近代文明の吸収が第一義であり、天主教の解禁は、その手段であった。しかし宣教師から見れば福音宣傳が第一義であり、科學知識の普及はその手段に過ぎなかった。とにかく宣教師は禁令撤回の幸運を歡び、康熙帝自身に對して、益々福音を説いたのである。なぜなら専制君主を天主教に改宗させることができれば、國民全部が之れに倣うものと宣教師は確信していたからである。しかし康熙帝は彼等の法話をば笑いながら聞き流していた。

康熙帝に次いで即位した雍正帝は佛教、特に道教の篤信者で、あつた從つて天主教には平素、好意を持たなかつたし、在朝の宣教師にも恩待を加えなかつた。しかし帝は外交官養成の目的を以つて、北京にラテン語の學校を設け、フランス耶穌會士パールナン (Parrenin) を校長に選任した。

しかし雍正元年(一七二三)福建省に迫害が起つたとき、帝は天主教を嚴禁して、國內から宣教師を放逐された。その理由は、中國の天主教徒は、自國の君主よりも、ローマ教皇を信賴しているから、一朝、有事の際、彼等は國家に叛逆する虞があるという疑念であつた。かくてマテオ・リッチが開教して以來、幾多の艱難と殉教とによつて、發展してきた福音宣傳の道も一朝にして杜絶するに至つた。さりながら雍正帝は、天文學者、美術工業家という資格に於いて、僅か十數名の宣教師を北京の會堂に殘留せしめられたのである。

乾隆帝は雍正帝と殆んど同じ意識を持っていた。しかし此の帝の方が遙かに老獪であつた。乾隆九年から同十一年まで、迫害事件が発生したとき、帝は言を左右に託して、宣教師の懇請を斥け、絶対に禁令を解かなかつた。そのみか宣教師の心裏を洞察して、巧みに彼等の科學知識と藝術的才能を利用した。今、在朝の宣教師が乾隆帝のために奉仕し

た事業の要目を挙げれば次の通りである。

- (I) 圓明園に西洋樓の建設と噴水の構築（乾隆十二年頃、一七四七）
- (II) 模型劇場の献上と器械人形の製作（乾隆十六年、一七五一）
- (III) 「得勝圖」の製作（乾隆三〇年、一七六五）
- (IV) 「坤輿全圖」の作製（乾隆三二年、一七六七）
- (V) 「皇朝中外一統輿圖」の作製（乾隆三七年、一七七二）
- (VI) パンシの尊像寫生（乾隆三八年、一七七三）
- (VII) 望遠鏡の説明と排氣機の御前實驗（乾隆三八年、一七七三）

乾隆時代に在朝して最も恩寵に浴したものはポルトガル傳道團所屬イタリー人カスチリヨーネ（Castiglione 郎世寧）であった。既に康熙時代にはギラルヂニー（Giardini）という洋畫家が朝廷に奉仕して、帝の恩待を蒙っていた。しかし此の畫家は耶蘇會の僧侶ではなかった。彼は市井の一俗人に過ぎなかった。程なく彼は異郷の風物に郷愁を感じて歸國の意志を北堂長に傳えた。北堂長は俗人に對しては強制權を持たなかったから、ギラルヂニーの歸國を諒承したのである。

ポルトガルの耶蘇會はギラルヂニーの後任者を物色していたが、仲々、見つからなかった。前述の通り、耶蘇會は中國皇帝の趣味に迎合して、禁教解除を實現しようと思圖していたから、此の目的のもとに、團員の中から適當なものを選んで、これを自然科学者、或は畫家に養成していた。

それでポルトガル耶蘇會はカスチリヨーネを適格者と認めて、これを中國へ差遣した。カスチリヨーネは康熙五四年

(一七一五) 北京に到着して、内廷に出仕した。當時、彼は二十七歳の壯齡であった。そして康熙、雍正、乾隆の三代に仕えて、左記の名畫を遺した。

撫元人秋林群鹿。準喝貢馬圖。大宛馬。如意驄。瑞鸞圖。瑪瑙斫陣圖。拔達山八駿。王鷹。圖阿玉錫持矛蕩寇圖。愛馬罕四駿。哈薩克貢馬圖。八駿圖。春郊試馬圖(唐岱と合作)百駿圖。香妃像。

これら題名から見て推定される通り、カスチリヨーネは動物、特に馬を描くことに名手であった許りでなく、肖像畫にもまた妙手であった。乾隆帝は少時、カスチリヨーネの描いた自己の畫像を晩年、學問所の楣間に見いだして、左の一詩を賦した。

寫眞世寧擅。寫眞(肖像畫)世寧、擅ほしいまにす。

續我少年時。我が少年の時を續えがく。

入室幡然者。室に入りて幡然はんぜんたる者。

不知此是誰。これこの誰なるを知らず。

その他、「如意驄」、「玉鷹圖」に就いても、一詩を賦して、郎世寧の妙技を稱えた。また乾隆二四年(一七五八)、清軍が準喝爾部、回部を戡定した時、乾隆帝は、この大勝を長く後代に記念しようとして、在廷の耶蘇會士カスチリヨーネ、アッチレ(Attiret)、シッケルバルト(Sichelbarth)、ダマセーナ(Damascène)に命じて、「得勝圖」を執筆せしめた。そのときカスチリヨーネの署名した作品は左の二圖である。

黒水圖解。格登鄂斫營。

かくの如くカスチリヨーネは在朝の畫家として最も帝寵を博していたから、迫害の起る度毎に、宣教師一同から推さ

れて、代表者となり、天顔に咫尺して、天主教解禁の件を懇願した。しかし乾隆帝は自己の趣味と政治とを混同しなかつたから、絶対にカスチリヨーネの懇請を容れなかつた。

清朝は滿洲出身であるから、文化らしい文化を持たなかつた。その結果、漢民族の文化を踏襲したので、遂には其の精神が漢化してしまつた。それ故、西洋の繪畫、特に建築に就いては、前掲、アツチレの書信に見える通り、かなり批判的な態度を示していた。當時、中國では密畫が流行していたので、カスチリヨーネにしる、アツチレにしる、西洋畫風に密畫風を取り容れなければ、皇帝は決して満足されなかつた。故に宣教師の描いた作品は純粹な西洋畫ではなかつたのである。

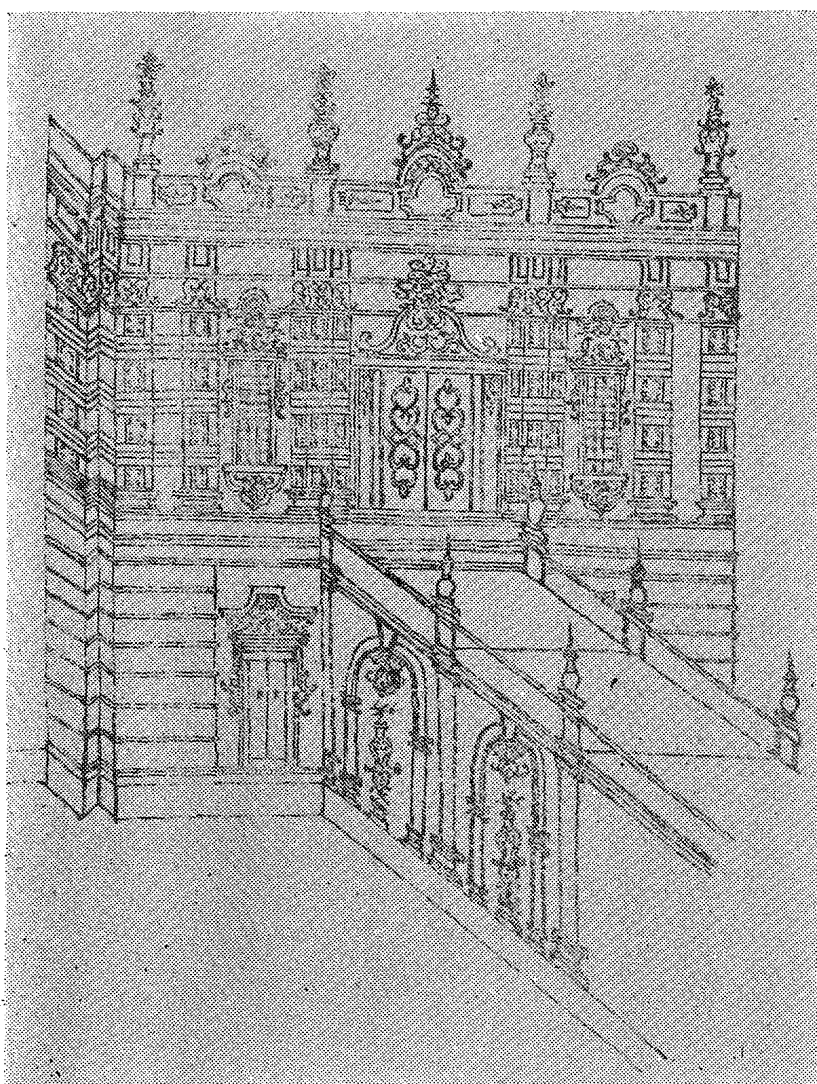
乾隆十二年（一七四七）、帝は西洋噴水の圖を御覽になると、新鮮な好奇心が刺戟された。それで直ちにお氣に入りのカスチリヨーネを呼びだして、噴水の説明を求められた。説明がすむや否や、在朝の宣教師中で、噴水を構築し得べき人物ありやと尋ねられた。しかしカスチリヨーネは即答を避けて、同僚と相談の結果、復答すべき旨を奏上したのである。然るに帝は御座所に引きとられるや否や、宦官をカスチリヨーネの許に遣わして、噴水の製作を任すべき宣教師を明日、參内して同伴せよと命ぜられた。カスチリヨーネは適任者の有無に就いて、深い疑念を持っていた。しかし乾隆既に適任者のあることを確信されていたのである。この事は西洋噴水の圖を御覽になって、いかほど帝の好奇心が刺戟されたかを立證するものでなければならぬ。同時に専制君主の横暴ぶりをも窺うことができる。とにかくカスチリヨーネは字義通り恐縮したが、専制君主の命令は法令であるから、絶対に服従しなければならぬ。そのうえ解教實現の上からも、叡慮に迎合することが宣教師の義務だったのである。かくてカスチリヨーネは必死となって適任者を物色した。幸ひフランス傳道團の中からブノワを見いだすことができたのである。

ブノワは祖國で傳道の傍、天文數學を學び物理學をも研究した。また水力器機の製作にも關係したことがあった。圖らずも此の經驗が役に立って、噴水すなわち中國語で言えば「水法」を築造すべき重任を擔うに至ったのである。

前掲アツチレの書信によれば、乾隆帝は西洋の階層建築を好んでいなかった。

故に西洋樓を建築する意志のなかったことは明かである。然るに乾隆帝は一七四七年(乾隆一二年)西洋噴水圖を御覽になるや、好奇心を刺戟され、直にカスチリヨ―ネを御召しになり、宣教師の中から、噴水構築の能力者を探し出せと嚴命されたことは前述の通りである。故に噴水を建築することが、帝の第一次要求であり、西洋館の構築は噴水との調和上の必要だったと言ふことができよう。

西洋樓の設計と工事監督とをカスチリヨ―ネが擔任したことは、次ぎの書信に



カスチリヨ―ネの設計圖

よって確證される。

「ブノワ師は二三年前、有名なヴァル・ド・サン・ピエールの器械を製作しました。それは西洋館の周邊を美化すべき、最も變化に富み、また最も爽快な噴水に水を供給する爲でありました。この西洋館はカスチリヨネ教兄の設計と監督のもとに建てられたものであります」(Lettre du P. Amiot au P. de la Touro, A Pékin, le 17 octobre 1754. Lettres édifiantes et curieuses)

西洋樓の設計と工事監督、また噴水の設計と工事監督に就いて、カスチリヨネとブノワとが如何ほど苦心したかは容易く推測することができよう。しかし此の大工事に對する困難は意外な方面に存在していたのである。

中國人は元來、排外的であり、謂ゆる攘夷主義を信奉していたし、殊に天主教に對しては根深い憎惡心を懷いていたから、此の計畫に關係する大官は、カスチリヨネとブノワに對し、絶えず敵意を示して、工事を妨害しようと企てたのである。そのみか中國には怖い迷信が横行していた。大臣諸侯は西洋樓の如き西夷の造營物を皇宮に建設すれば、必ずや國家の不祥事が發生するに違いないと言ひ觸らしていた。しかしながら龍顔を冒して、諫議を試みるものは一人もなかった。彼等はただ迷信的風聞を朝廷に流布して、乾隆帝自身が洋館建設の大計畫を自發的に放棄されることを秘かに期待していたのである。

ところが乾隆帝は、さとも這般の事情を推察し、宣教師を激勵されたばかりでなく、圓明園内に自由に出入する恩典をも與えられたのであった。

この工事が何年かかったか、資料に乏しく明言することはできない。しかし乾隆十二年頃には完成したらしい。西洋樓と水法とは圓明園の屬園、長春園の北路に構築された。

後章に於いて陳述する通り、圓明園は一八六〇年、英佛聯合軍に依って燒却され、しかも清朝が荒廢に任かして置い

た結果、今日では全く過去の存在と化して、その片影すら見ることができない。そして御製「四十景詩」に挿入された唐岱沈源の合作畫とブノワの記述を除いては、圓明園の景觀を窺ふことができない。西洋樓もまた兵火にかかって焼け落ちたが、幸い二十幅の銅版畫が残存しているし、またフランス側には、西洋樓の建築に關する解説と批評とがあるので、西洋樓の全貌を想見することが可能なのである。

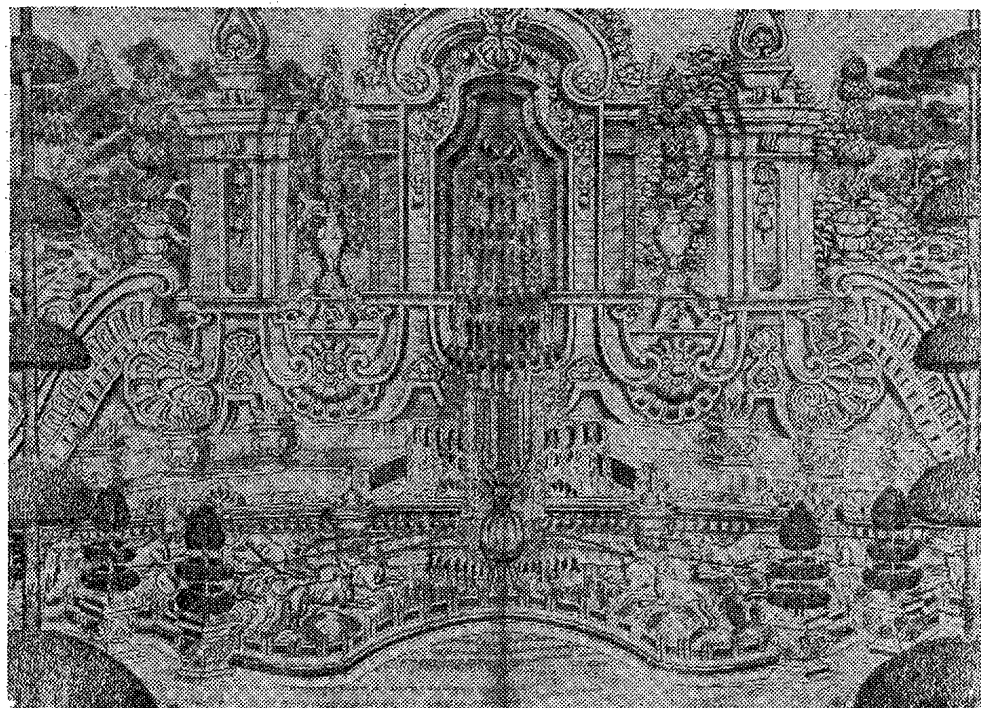
北京在住のフランス耶穌會士ブルジョワは一七八六年（乾隆五十一年）パリーのドラトウールに書信と一緒に「圓明西洋樓二十景圖」を送った。この書信によると、乾隆帝は一七五七年（乾隆二十二年）、かねてカスチリョーネに就いて、西洋畫を習っていた中國人の畫家、二三名を呼び出させられて、西洋樓の圖繪を製作せよと命ぜられた。これらの中國家は皇帝の眼前で草圖を描いた。乾隆帝は屢この草圖に修正を加えられた。そのあとで遂に此れらの下圖を銅版に彫刻すべき許可を與えられた。要するに此の銅版畫は中國畫家が、西洋畫家の監督の下に完成したものである。換言すれば中國畫家が初めて畫いた西洋畫として、その藝術的才能を窺ふべき試作と言わなければならない。幸い東洋文庫は此の銅版畫を所藏しているから、私は親しく檢覽することができたのである。その目次を擧げれば、

(1) 諧奇趣南面。(2) 同北面。(3) 蓄水樓東面。(4) 花園門北面。(5) 花園正面。(6) 養雀籠西面。(7) 養雀籠東面。(8) 方外觀正面。(9) 竹亭北面。(10) 海晏堂西面。(11) 同北面。(12) 同東面。(13) 同南面。(14) 遠瀛觀正面。(15) 大水法正面。(16) 觀水法正面。(17) 線法山門正面。(18) 線法山正面。(19) 同東面。(20) 湖東線法畫

この目次から見ても十二の西洋館が構築されたことが解かる。

さてブルジョワから此の版畫を寄贈されたドラトールは、かねて中國に對して、深甚な關心と興味を懷いていたから、絶えず中國在住の耶穌會士と文通していた。そして宣教師の手を経て、中國の國産品や美術品を蒐集していた。彼

はブールジョワから寄贈された西洋樓二十景圖繪を見て、その論評を自著「支那庭園建築論」(Delatour, Essai sur



水 噴 の 趣 奇 諧

Parchitecture des Chinois sur leurs Jardins et leurs mœurs, et usages, 1784)の中に収録した。この書は僅か三十六部の限定版であるから、稀観書中の稀観書として尊重されている。なお先年、出版されたモーリス・アダム著「圓明園」(Maurice Adam, Yuen-ming-yuen, l'oeuvre architecturale des anciens jésuites au XVIII^e siècle, Péking, 1936)も参照すべき價值を持っている。

ブノワの書信によると、彼は先づ諧奇趣に噴水を装置した。噴水の導管は銅製であり、その主要部は人體の大きさを備えていた。此の洋館は美しい水に飾られ、諸處に風雅な泉水が見えていた。最も大きな池はヴェルサイユやサン・クルーの池に匹敵していた。泉中の中央と左右に水塔を置き、周圍には禽獸の像を飾って、その口から高く噴水していた。

ついでブノワは海晏堂にも噴水を装置した。彼は此の噴水に最も趣向を凝らし、瀑布の周圍に十二支の獸像を二側に配列して、一刻毎に交る交る此の獸像の口から水を噴き上げさせて、一種の

時計に供したのである。

海晏堂の隣り、遠瀛觀にも大水法を築造した。前面の巖上、池中、地塘には「禽獸合戦」、「犬に追い詰められた鹿」の状景を配した、禽獸の口から噴水せしめたのであった。

乾隆帝は第一の噴水を御覽になって、大いに感心されたが、第二、第三の噴水を叡覽されると、その絶妙な意匠に感歎されたのであった。

西洋樓と水法とは中國に於ける最初の西洋建築であった。殊にその大装置はヴェルサイユ離宮の設計に優るとも劣らなかつた。總て事大主義を奉ずる乾隆帝が、その西洋趣味を満足されたことは言うまでもないのである。

(V) 圓明園に於ける掠奪と其の燒毀

一八六〇年に起つた清國對英佛戰爭に關して、その原因や其の過程を研究することは、本稿の目的ではない。英佛軍が圓明園に這入つて掠奪を恣にしたこと、ついで報復のために此の豪華殿を燒き拂つたこと——この二項に就いて、聊か其の原因を追究し、且つ其の情景を描出したいと思ふのである。

一八六〇年十月三日、英佛聯合軍は北京に向つて進撃を開始した。英軍を先頭として、佛軍がこれに續いたが、どういふ譯か、兩軍、途を失つて別れ別れになり、六日、英軍は北京城外の黃寺に達して、そこに宿營したが、佛軍は圓明園の門前に到着した。そして英軍の騎兵隊も道を失つて、佛軍のあとから、圓明園に達したのである。

十月七日、早朝、佛軍司令官モンツッパン (Montauban) 將軍は圓明園内を巡見した。そして先づ此の將軍の眼を驚したのは、この離宮の豪華と風景の絶佳なことであつた。そして將軍は本殿にも別殿にも到る所に貴重な美術品や工

藝品が字義通り充滿していることに益々驚いたのである。この状景を見ると、先づモントゥバン將軍の意識に登場したのは掠奪という觀念であった。古來、戰勝者が敵の財寶を掠奪することは、彼等の常習であり、言はば特權であった。彼等の立場から見れば、掠奪は勝者の餘得であり、言はば光輝燦爛たる公盜であった。また掠奪は勝利の樂しみであり、この樂しみがあればこそ、士卒は流血や落命の危險を冒すのだと言ふことができるであらう。

佛軍は英軍よりも先きに圓明園に到着したのであるから、もし佛軍が掠奪を開始したとすれば、佛軍の方が掠奪上、遙かに有利な状態に置かれていることは言うを俟たない。かくては今迄、協同作戰を取つてきた友軍の感情を害することもまた自然の道理である。故に英軍を差し置いて、佛軍が掠奪を開始するならば、今後の作戰上に支障を來たす虞があるかも知れない。かういふ想定から、佛軍の司令官モントゥバン將軍は英軍の到着するまで掠奪を嚴禁したのであった。

しかし此の禁令は掠奪その者を禁止したのではない。掠奪開始の時間に制限を加えたに過ぎない。換言すれば掠奪の開始時間を延期せしめたに止まるのである。従つて此の將軍もまた掠奪の權利を認めていたことは明かである。

佛軍から一日おかれて英軍の本隊が圓明園に到着した。そのとき英軍は佛軍が正大光明殿の門側に駐屯しているのを見いだした。そして英軍指揮官グラント (Grant) 將軍もまた先づ圓明園の宏麗と清潔なことにビックリした。

光明正大殿には硬玉、碧玉、銅器が充滿し、また外國使節の献上した置時計、懷中時計も數え切れないほど夥しかった。本殿に近い或る建物の中には山嶽砲が二門、並んでいた。中國皇帝は此の武器を裝飾品として取扱つていたに違いない。圓明園の或る本殿から夥しい數量の金銀塊と絹織物、毛皮とが發見された。

英佛司令官は協議して、美術工藝品の中から、最優良品を選んで、ナポレオン三世とヴィクトリヤ女王に献上し、他は英佛將兵に賣却することに決定した。

この決定が英佛の士卒に傳わると、彼等は、掠奪心を抑制することができなかつた。忽ち軍紀を忘れて、持場を離れ、園内に雪崩込んで掠奪に狂奔した。

掲蓋をあけて床下に這入ると、立派な箱が見つかった。その箱の中にはダイヤモンド、眞珠、紅玉、碧玉、珊瑚、瑪瑙、翡翠を始めとして寶玉類がギッシリ詰っていた。兵卒は此等の寶玉類をできるだけ、背囊の中に押し込み、靴下の中にも詰め込んだ。また銃劍の尖きで佛像を壊わして、寶石を求めたのである。とにかく運搬できないものは粉々に碎いた。中庭には絹織物、金繡、銀繡が、脛を没するほど、散らかったり、積まれたりして、歩行も自由ではなかつた。ある兵卒が煤けた佛像の蓮座を壊わして見ると、純金が燦爛と輝いた。

小形の美術品は掠奪されたが、大形の陶器、磁器、銅器は廊下や地上に委棄されていた。殊に宋明の花瓶が叢の中で、粉々に碎かれていたし、巨大な象牙が幾本となく、樹蔭に投げ棄てられていた。

室内の喧噪、廊下の靴音、園内の騷擾は野趣と靜寂を尊ぶ禁宮裏の狂躁樂であつた。今は松籟竹韻も聞えず、小鳥の宛轉も耳にすることができない。森の下道、松柏の樹蔭、石橋の袂は西夷の將卒が參々伍々、集つて聲高に話していた。俄かに喧嘩が起つて、殴り合いが始つた。全く軍紀も軍律もなかつた。ただ人間の貪婪、むしろ野獸の貪欲があるばかりであつた。

英佛司令部は士卒に對して、掠奪品を全部提出せよと嚴命した。そして掠奪品を競賣に附した。無論、將卒の所持金は僅少であつたから、落札價格も至つて低かつた。そして英佛司令部は賣上高を均分して、これを一同に分配した。掠奪利得の不平等、殊に此の不平等から生ずべき不平不満を恐れていたのである。ところが寶石の如き掠奪品は背囊や行李の底に隠くすことができたのである。

英佛將卒が掠奪を行い、さらに破壊に狂奔したことに、然るべき原因と事情とがあったのである。それは宮殿の一室から英佛士官の軍服が発見され、しかも其の軍服には血痕が生々しく附いていたからである。殊に卓上には英佛士官の所持品が並べてあった。これらの軍服と所持品とは、先日、滿洲兵の不法行爲によって監禁された英佛士官の肌身に着けていたものに違いない。恐らく清朝の高官は咸豐帝の天覽に供したのである。戦友の遺品を見ると、英佛將士の敵愾心は、いやが上にも激化した。彼等は復讐の念に燃え立ったのである。

英佛の將卒は圓明園の本園から、屬園の長春園に侵入した。彼等は西洋樓を発見して、一種の郷愁を感ずると同時に、その宏麗な景觀に驚歎したのである。しかし彼等に忽ち掠奪を開始した。西洋樓の内部にはルイ十五世から乾隆帝に献送されたゴブラン織で張り廻してあった。その織物にはルイ王家の紋章、白百合が織り出されいた。またフランス王朝から送ってきた貴婦人の畫像が並んでいた。その畫像の下部には貴婦人の爵位と姓名とが書き込んであった。そのほか宣教師が乾隆帝のために製作した時計、地圖、繪畫、玩具、望遠鏡、排氣機、等、等が所せまく陳列されていた。

外國兵は銃劍を揮って、先づ貴婦人の畫像に突き通した。それから手あたり次第に破壊して、兇暴の快を食った。十月八日、清國政府は英佛聯合軍が圓明園を占領し、あまつさえ其の財寶を掠奪するに至ったという公報に接すると、痛憤を禁ずることができなかった。併し時局は既に急迫を告げ、英佛軍の強硬な要求を斥けて、其の捕虜を殘らず還附しなければ、英佛軍は北京城に進撃するかも知れなかった。それ故、廟議は捕虜を還附することに決定したのである。かくて十月八日、先日午後、通州で滿洲兵に捕えられた英國領事パークズ (Parkes) をはじめ、九名の捕虜が英佛軍に送還された。

翌九日、佛軍は圓明園の門前から撤退して、北京城の北邊に駐屯していた英軍と合流した。

翌十日、英佛軍の司令官は清國政府に對して、北京、安定門の明渡を要求し、此の要求を拒むならば、忽ちに北京城に砲撃を加うべきことを恭親王に通達した。

清國政府は此の要求に屈した。その結果、北京の城壁には英佛國旗が翻って、聯合軍は紫禁城に對して、活殺の權を掌握するに至った。

清國政府は聯合軍の強硬な要求に屈して、殘餘の捕虜を還送してきた。

英佛側の計算によれば、英軍の捕虜は二十六名、佛軍の捕虜は十三名であった。然るに敵軍の送還してきた捕虜は、全部併せて英軍側十三名、佛軍側、六名に過ぎなかった。殘餘の捕虜は敵の虐待によって非業の死をとげたに違ひない。果して十月十七日、敵軍は捕虜の死體を送ってきた。英佛將卒は此れら死體を見ると、憐憫の情にかられると同時に、痛憤の念が心頭に漲ってきた。

生きて歸ってきた捕虜は敵軍の虐待を司令部に上申し、また戰友にも物語った。

捕虜は先づ殘酷な拷問にかけられた。そのあと縛られた儘で、荷車に載せられ、北京郊外の圓明園に運ばれたが、その道路は凹凸を極めていたし、荷車にはバネが附いていなかったから、荷車の振動が直接、肢體に傳わって、局部の苦痛が段々、皮肉に食い込み、忽ち皮膚が擦りきれた。圓明園に到着すると、手足を強く縛られていたので、もう身動きができなかった。しかも敵兵は繩の結び目にシタカ水をかけたので、結び目が段々、收縮して、手足をはじめ、脊中や腰が強く締めつけられ、局部局部がナイフの切先でエグられるかと思うほど痛かった。そして全身、縛られた儘で戶外に曝された。時しも仲秋の候、夜に入ると冷氣が全身に沁み込んできた。

捕虜は水と食とを求めた。すると汚物を口に押し込まれた。英軍のアンダーソン中尉がインド兵の捕虜に頼んで、繩

の一部を噛み切って貰らおうとした。ところが張番の敵兵に見つかって、中尉とインド兵も足蹴げにされて、地上に轉々した。

その後、捕虜は雁字ガラムに縛られた儘、またもや荷車に乗せられて明の太陵に近い某村に送られた。細い繩は、度せ衰えた捕虜の肉體に食い込み、手首の骨が現われて、血液の循環が止まった爲に、指の爪先が紫色に變じ、遂に爪がポロリと落ちた。そして蛆虫が生々しい瘡跡から湧いてきた。捕虜の中には苦痛の極、氣が狂って嚙言ばかり繰り返す者が現われてきた。比較的、心身の強力な者は戦友が目を追うて、非業の最期をとげるのを目前にしていたのである。

こういふ捕虜の報告が、どれだけ聴く人の敵愾心を激昂させたかは言うまでもない。それ以上、聴く者を噴慨させたのは、捕虜の姿その者であった。捕虜の顔色は蒼ざめ、頬の肉は痩せ落ち、眼はくぼんで、異様に血走っていた。捕虜の陰惨な姿、その衰え切った口許から、時には涙ぐんで、時には大粒の涙を流して、虐待の悲痛を訴えたのであった。そして極度の憔悴と生々しい瘡跡とが報告の内容を實證していた。

間もなく清國側から捕虜の死體を送ってきた。この死體を見ると、全軍の敵愾心が益々、激奮して、報復の精神が漲りだした。

英國特派大使エルギン卿(Lord Elgin)と英軍司令官グラント將軍は報復政策を執るべきことに意見の一致を見た。しかし復讐の手段に就いてはまだ意見が纏まらなかった。英軍側は報復膺懲の件に關して、佛軍司令官モントウバン將軍の協賛を求めた。しかし將軍は賛同しなかった。

茲に於いてグラント將軍は單獨で圓明園の燒却を敢行しようとして決意し、十月十八日、部下のサー・ジョン・ミッチェル(Sir John Michel)に三千五百の兵を授けて、圓明園の燒毀を命じた。



諧 奇 趣 の 廢 墟 (一八八〇年頃)

英兵は掠奪しながら、宮殿から宮殿へ、また室から室へと火を放った。二日二晩、北京の空は濛々たる黒煙に包まれ、夜に入ると、火焰が眞赤に天を焦がし、火の粉が風に飛んで、一種の壯觀であった。外國軍の中には、ローマを焼いた暴君ネロの故事は想いだすものも少くはなかったし、焼却を命じた英軍の將校は、炎々たる焰を眺めて、却って暗澹たる氣持に沈んだのであった。

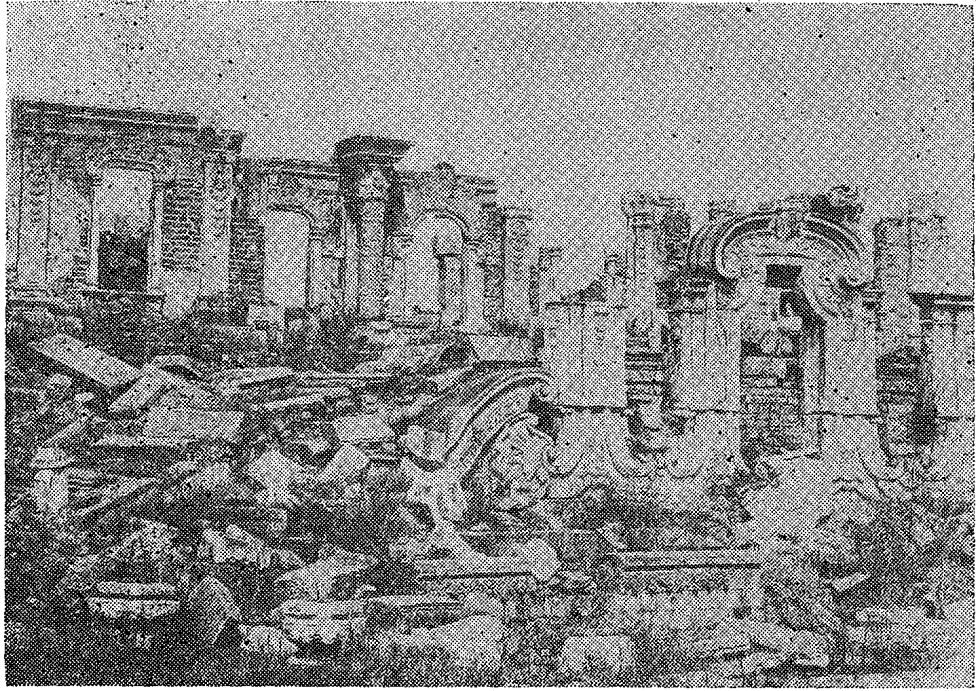
かくて東洋第一の離宮、圓明園は忽ち烏有に歸した。宣教師の築造した西洋樓も、その噴水も、また天下の珍籍をはじめ「四庫全書」を收藏する文源閣も灰燼に歸したのであった。(Cordier, L'Expédition de Chine en 1860. Grant and Knolly's, Incidents of China war of 1860. Varin, Expédition de Chine. Walrand, Letters and journal of Earl of Elgin)

(VI) 結 語

昭和十六年の夏、私は上海から北京に廻わって、此の古い都を游歴した。ある日、私は北京に留學していた同僚と一緒に、車を驅つて、圓明園の遺跡を見物に出かけた。私が北京で買った寫眞帖には、西洋樓のものだったらしい大理石の門扉が雜草の上に倒れ

痛恨も交ざっていた。

圓明園の研究



「大水法」南面の廢趾（一九一九年）

ている光景が撮影されていた。しかし現場に行ってみると、ただ昔の宮牆の一部が残っているばかりであった。この故跡は見渡すかぎり茫茫たる平野で、青々と麥畑が續いて、處々に楊柳や槐樹の木立が見えていた。そして炎天の下で、竹の唐人笠を被った農夫が參々伍々、鋤を使って、土を掘りかへしていた。その鋤の柄が、農夫の身長より遙かに長いことが私の目を引いた。

この故跡を前にすると、當年の盛觀が文籍を通じて、私の目に浮んできたし、また歴史的事實が心に甦ってきた。だから「國破れて山河あり」という哀愁が直ぐ意識に登場してきた。同時に「滅びるものの美しさ」、言い知らぬ詩情が胸に迫ってきて、暫く茫然として樹蔭に佇んでいた。私は目を瞑った。萬感が心に湧いてくる。私は目を見開いた。一面の畑と農夫の姿が見えるばかりである。また目を瞑った。無量の感慨が胸に迫ってくる。

私は樹蔭に佇んで、暫く行きもやらず、去りもやらなかった。

ほんとに低徊、去るに忍びずという哀感の中には、この圓明園に西洋人が侵入して、その財寶を掠め、その宮殿を焼き去ったという

圓明園の掠奪と燒毀とが英國議會の問題に取り上げられると、當時の特派大使エルギンは、色々、事情を釋明した後で、「清國政府に莫大な賠償金と捕虜の遺族弔慰金とを要求すれば、財政困難に悩む清國政府は國民に多額の増税を課するに違いない。

その結果、國民は苛斂誅求に泣くであろう。しかし英國は中國の國民を相手にしているのではない。飽くまで清國政府が膺懲の対象であるから、この政府の最も重寶視する圓明園を燒毀したのである」と辯明した。

この釋明が後からつけた理窟であり、詭辯であることは言うを俟たない。それにしても此の特派大使は中國政府の泣き所を知っていて、此の急所に一撃を加えて、報復の實を擧げんとしたのである。

この一事に徴しても、圓明園が世界の名園だったことが證明される。

思うに戦争は人類の發狂行爲であるから、戦争行爲を、今日の如き平和精神から論議することは必ずしも妥當とは言われない。殊に圓明園の掠奪と燒毀とは約一世紀前の史實である。當時、侵略戦争は君主の家常茶飯事であり、その成功は赫々たる武勳と見なされていた。現にナポレオン三世の如きは、叔父ボナパルトの故智を學んで、帝國主義を奉じ侵略戦争を行ったのである。

當時の戦争は小規模に止り、國家總動員の必要もなかったし、世界戦争にまで發展しなかった。まして航空機、潜水艦、原子爆弾もまだ發明されていなかった。自然科学、一言すれば學問の發達が人類の絶滅を豫言し、従って世界が擧げて平和を悲願する時代ではなかった。

こういう悲願に達する迄には、百年の歲月が流れた。この間、人類は幾多の苦難を経験し、人智が進歩して、思想の變化を來たし、今日の民主主義、平和主義、文化主義に到達したのである。故に百年前に行われた英佛聯合軍のヴァン

ダリズムを、今日の時代精神から批判することは、人智進歩の原理を知らざる迷誤と言わなければならない。まったく子供の悪戯を大人が向きになって叱りつけるのと同じである。

私は前に申上げた中國旅行の途次、南京の天文臺に立ちよった。昔、北京の觀象臺には赤道經緯儀、紀限儀、地平經緯儀、黃道經緯儀、天體儀、象限儀、璣衡撫辰儀、奎表、漏刻、渾儀、簡儀が飾ってあった。此れらの天文器儀は元の郭守敬の製作したものであるが、現存のものは明の正統年間に原器を模造したものである。そして義和團事件の際、フランス軍、ドイツ軍は戦利品として、此れらの天文器械を二分して、掠奪した。しかしフランスは北京の公使館に運んだだけで、光緒二八年、清國政府に還附した。然るにドイツ軍は自國に運搬してポツダム園内に飾った。ところがドイツは前大戦に敗れ、ヴェルサイユ條約によって、分捕った天文器儀を中國に還附した。そして國民政府が南京に近代式の天文堂を設立したとき、最も由緒ある渾儀、簡儀、漏刻、奎表を南京の天文臺に運んだのであった。それ故、私が此の天文臺を訪れたときには、此れらの天文器儀を親しく觀覽することができたのである。當時、京都天文臺の諸君が此の天文臺を管理していた。

私は草原に飾られた渾儀と簡儀を見物した。兩儀とも青銅製の巨大な龍が四方から、この器械を捧げていた。御承知の通り、龍は中國皇室の紋章であり、我が皇室で申せば、菊花の御紋章に相當し、貴重價値を象徴している。然るに龍の爪先が、どれも一寸ほど、とぎ取られているのである。

これは誠に悲しい發見であった。何者の仕業か、また何ういう譯で、かういふ文化破壊が行われたのか、私は案内の天文臺員に尋ねてみた。南京を占領した日本軍の一部が暫く此の天文臺の構内に駐屯していた時、兵隊が歸國の土産、大勝占領の記念品として、斯かる暴行を敢えてしたそうである。

殊に漏刻は長らく兵隊の便器に利用されていた。その爲めに我が天文臺員は、掃除するのに泣かされたそうである。そう聞いて見ると、異様の惡臭がブンと私の鼻を掠めた。

私は此の話を聞いて啞然とした。そして我が皇軍の惡行ただだけに、私は恥かしい氣がしたのである。とにかく無智な者、無識な軍人には手がつけられない。度しがたいのである。

我が軍の占領地に於ける破壊、掠奪、暴行に至っては擧げるに違がない。これも僅に二十年前の出來事である。故に英佛聯合軍が約百年前、圓明園を掠奪したり、焼却したりしたヴァンダリズムを指摘して、その不正を論難する權利を、私は不幸にして持ち合はせていない。

近來、漸く文化保存の機運が盛んになり、ドイツ軍がフランスの過半を占領した際にも、第一次大戦に行った殘虐と破壊とはこれを憤んだのである。ドイツ軍はパリーの記念物も破壊しなかつたし、ヴェルサイユ離宮も兵火をまぬかれた。

アッチレ神父の言うように、ヴェルサイユ離宮と圓明園離宮とは東西の藝術殿であり、兩半球の双壁である。こういう美術殿堂はフランス人の所有でもなければ、中國人の所有でもない。實に世界の共有財産であり、人類の公共文化財なのである。殊に圓明園の如き美術殿堂、またその中に集められた美術品には、藝術家の精神が生きているのである。この精神が虐殺されたことは、どれだけ美術の職能と發達とを妨害するか解らない。また乾隆帝の如き專制君主の治下でなければ、こういう豪華殿は二度と實現しないであらう、そして圓明園は西人の一炬、焦土と化し、今は其の痕跡すらも、地上にとめないものである。私は圓明園に對して、愛惜の情を禁ずることができない。それ故、東西の文献を涉獵して、往時の盛觀を紙上に復興しようと試みたのである。